

悟空が歸つて來ると地上の輪ばかりで人は居ぬ、あゝ又事を仕出來したと、樓閣を見るとそれも無くなつて居る、土地神を呼び出して聞くと、

「彼處に魔洞あり七年前より獨角大王と云ふ妖怪が棲みなして居る、師父等は多分其の爲めに難に遭つて居らるゝだらう」と云ふ、そこで貰つて來た飯の鐵鉢を土地神に預けて置いて、樓閣のあつた邊へ走せ來ると、果して一の洞門がある、刻して金魄洞と書いてあつた、棒をあげて洞門を亂打し、

「妖怪出でよ、師父を返せ」と叫ぶと、長槍を提げて獨角大王が現はれ出で、相戦ふ事三十餘合、夥多の魔兵も集まつて來て、悟空を十重二十重に取り圍む、悟空が一聲叫んで棒を投げ上げると、空中で分れて百千の棒となり、魔兵共の頭の上に落ちかゝる、獨角是を見て

「流石は天宮を闢がした腕前だ」と褒めながら、袖の裡から一つの玉を取り出して、同じく空に投げ上げると、彼の百千の棒忽ち元の一棒と合して、獨角の手に收まつてしまふ、武器を奪はれて、悟空かなはじと逃げ退いた。

逃げて山の頂に來て、悟空は

「彼の武藝は恐れぬが、彼の不思議な寶具には及ばぬ、先刻彼奴が流石は天宮を闢がした云々と云つた、天宮を闢がした己を知つて居るからには、必ず天上の惡星が下界に下つたものであらう」と思案して、雲に乗つて天宮に昇り、玉皇上帝に奏聞して天上を調べて貰つたが、天上に缺落者はなかつた、それにしても、武器は奪はれる獨力では敵し難いと、李天王哪吒太子及び火德星君を加勢に頼んで、金魄洞に歸り來り、

「妖怪出でよ」と呼ばると、獨角再び現はれて、

「やあ猴奴手傳ひを頼んで來たな、何度來ても同じ事だ」と長槍を把つて突いて來る、哪吒太子が變じて、三面六臂となり、數多の兵器を六手に持つて、相戦ふ事二十合、六種の兵器を空中に投げ上げると、六種の兵器が六十となり六百となり、雨の如く妖怪の頭上に下る、妖怪が冷笑つて、

「小伴、汝も己に兵器を贈るか」と例の玉を出す、兵器は盡く妖怪の手に歸して、さしもの太子素手となつて山上に逃げ上る。

二十九 金剛塚

此度は李天王が洞門に押し寄せ、妖怪が

「李天王汝は小伴の武器を貰ひに来たか」と嘲つて突いてかゝる、李天王怒つて大刀を振つて相闘ふ、やがて妖怪がまた例の玉を出しかゝると、李天王が首を回らして合圍をする、火徳星君が空中に現はれて、數多の火兵と共に火龍火馬火騎火鼠を放ちかけ、烈々たる火焔を起して、妖怪を取り圍む、妖怪毫も驚かす、彼の玉を投げ上げると共に、李天王の大刀も火龍も火馬も悉く、其手に歸し、皆々は素手となつて山頂へ逃げ上る、悟空が

「彼奴火を恐れぬからは、必ず水を忍むであらう」と云つて、また急に雲に乗つて、天上に昇り、水徳星君を頼んで來た、水徳星君手に一つの大盃を持つて居る、大盃は黄河の水のすべてを盛るに足ると云ふ、大盃の半分は即ち黄河の水量の半分だ、半盃の水を以て洞門に押し寄せ、

「妖怪出でよ」と呼ばつて、洞門の開くを見すまし、卒然に半盃の水を傾け盡くした、妖怪更に驚かす、彼の玉を取り出して、彼方を押え此方に推すと、さしも凄しく流れ溢れ

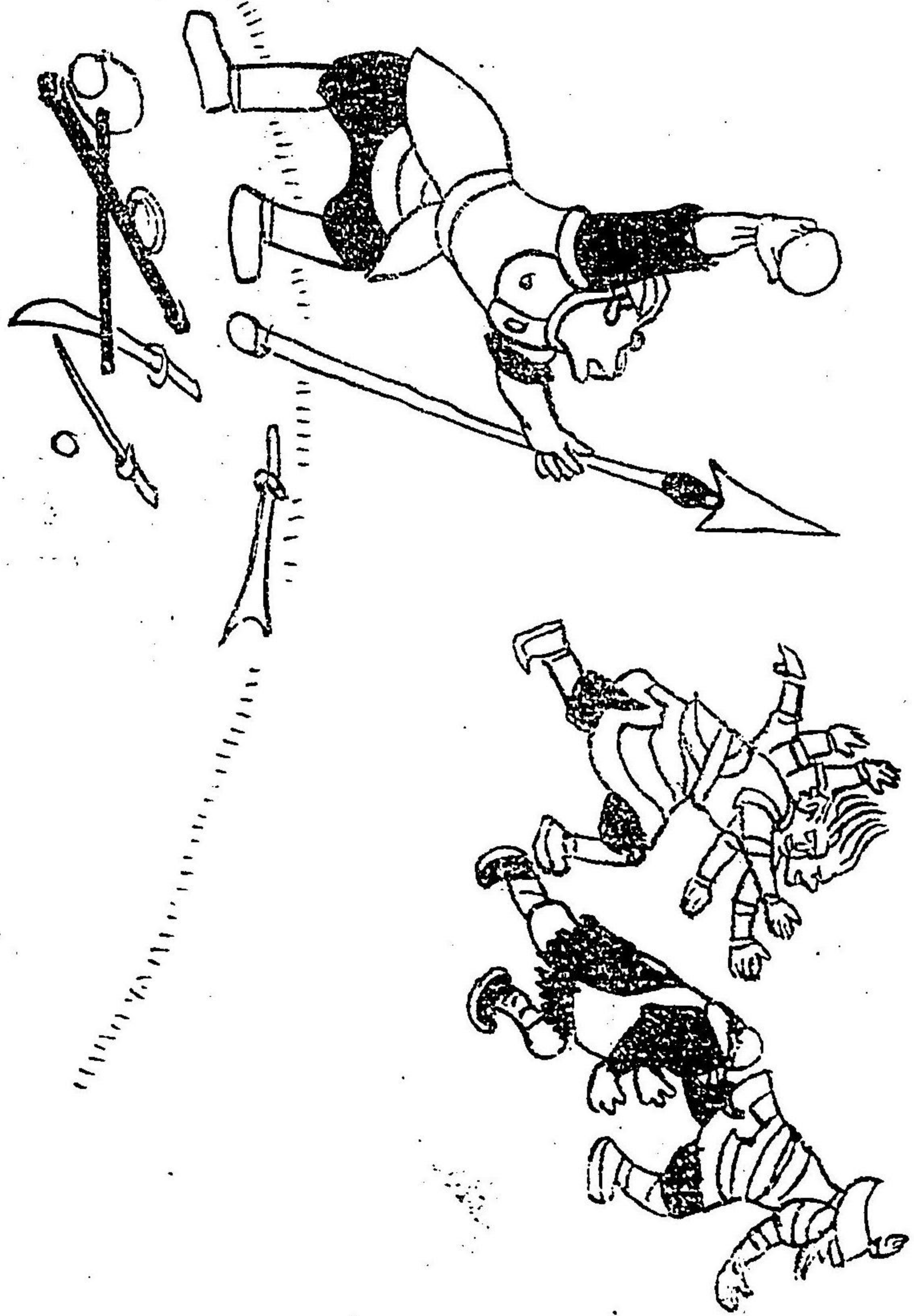
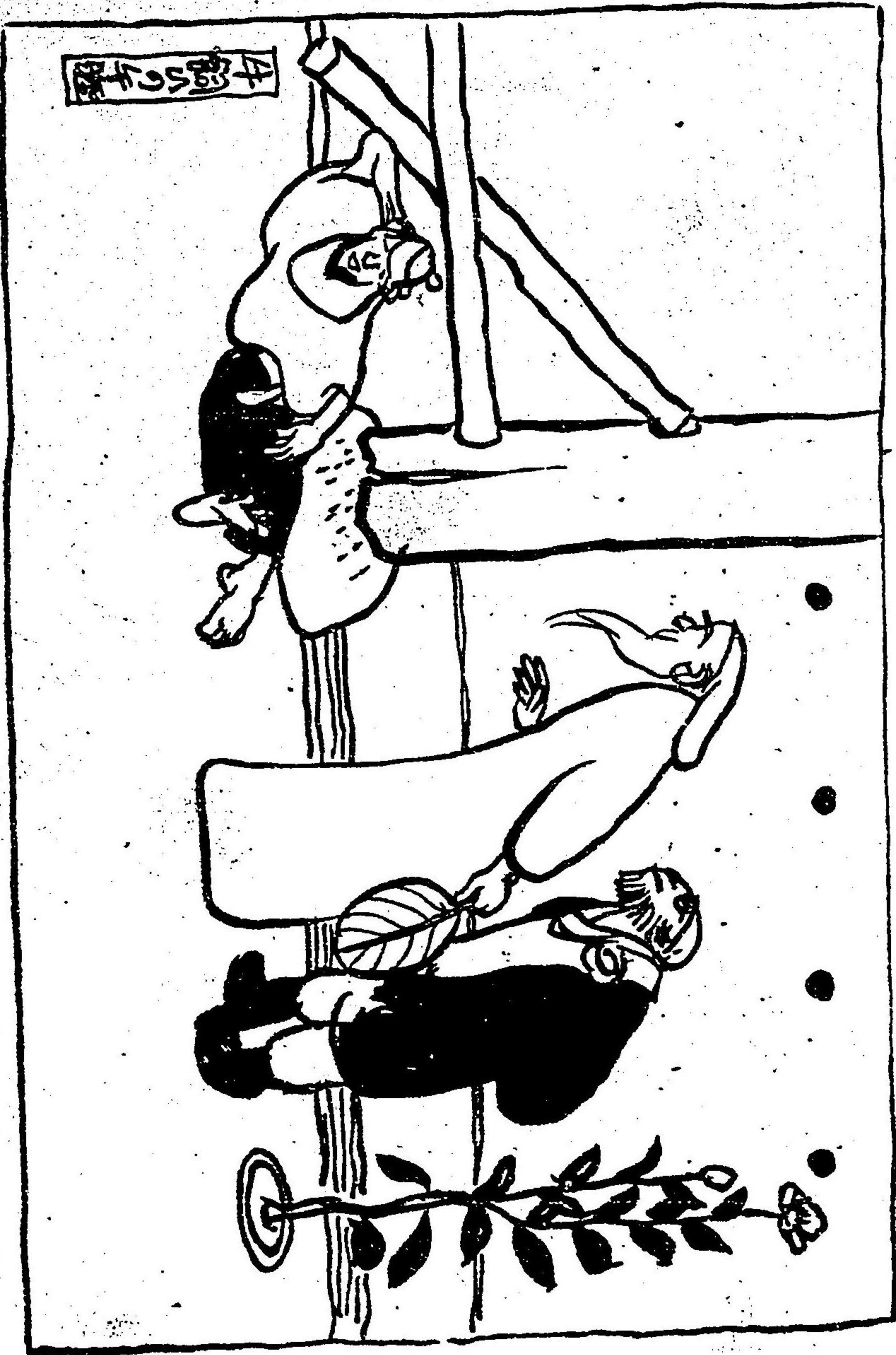


Illustration signature or mark.

衝き進んだ水が、逆に悟空等の方へ向つて来る、忙がはしく雲に乗つて飛び退くと、山の
 下なる大谷へ流れ落ちて、滔々たる洪水となり麓の方へ漲り行く。
 彼の寶貝のある間は、手の出しやうもないから、何とかして盗み取らうと、悟空が青蠅と
 變じて洞内に忍び入つて見るに、今しも彼の獨角が、勝軍の酒を祝つて、酔つて眠りに就
 く處である、玉は何處と目を注げると、寝るにも身を放さぬ用意と覺ほしく、左の腕に緊
 緊と結びつけてある、しばらく寢息をうかりつて、變じて黄なる蟲となり、左の腕を一口
 咬む、妖怪が目をさまして、何か吐きながら寢返り打つ、また一口咬んで見る、寢返りを
 打つばかりで、玉の紐を解かうともせぬ、是では望みを達しやうもないので、再び蠅と
 變じて奥の方へ行つて見ると、其處等白晝の如く光り輝き、火龍や火馬が繁がれながら鳴
 き嘶いて居る、彼のは自分の棒やら、天王父子の武器やらが立て掛けてある、先づ棒を押
 取り、火馬に乗り、身の毛を抜いて數に應じて小悟空を作り、兵器を擔がせ火龍を曳かせ、
 火鼠火鴉を放つて一度に、唳と荒れ廻り、洞中を盡く火にして、洞門外に奔り出た、魔兵
 共が焔の中に目を覺まして、哭く叫喚く逃げ廻る、大方は此處の隅彼處の隅に焼け死んで
 しまふ、獨角が狼狽へて、玉を把つて走りめぐり、東を押せば東が消え西に投ぐれば西が



消え、辛くも消し留てめ大汗になり、

「是れ必ず猴奴の所爲であらう」と罵り罵り追つて来る、李天王等は兵器再び手に入つて大きに喜び、追つて来た獨角を取り圍んで散々に戦つたが、何度戦つても結局は同じ事である、不思議な玉が投げられると等しく、衆人すべて素手にされて、是非なく山頂へ逃げ退く。

兎角彼の妖怪の正體が知れぬから、策の施しやうが無いと、皆で相談して、此度は太上老君の處へ聞きに行く事になつた、悟空が雲を放つて、直ちに離恨天に飛び昇り、老君に會つて、斯く斯くの妖怪が西方の道に居て、師父を捕へましたと話すと、老君が面倒がつて、

「汝達が經を取る事と、此の我と何の關係があるのだ」と相手にならぬ、是非なく歸らうとして老君の牛部屋の前を通ると、老君の乗用の青牛が居す、牛飼ひは遊寝して居る、取つてかへして老君に、

「老君、貴老の牛は如何なされた」と云ふと、老君が驚いて、牛部屋に来て、牛飼ひを呼び覺まし訊問する、牛飼ひが恐入つて平伏して



「實は七日前に丹藥一粒を盗み喰つて、今日まで眠りこけて居りました、其間に牛が逃げたと見えます」と詫びる。

天上の一日は下界の一年、七年前から居ると云ふ獨角大王なるものは、必ず其の青牛だらうと、老君が今更の如く急ぎ立つと、悟空が

「青牛だけなら容易いものであるが、貴老は外に寶貝を紛失なさりはしませぬか」と注意すると、老君が再び驚いて吟味する。

「いや大事だ、拙老の金剛珠が見當らぬ、彼れは此上もなく秘藏の寶で、若し彼の外に、

芭蕉扇まで持つて行かれたら、拙老と雖も手の出しやうが無かつたに、いざ／＼同行して取り押えませう」金剛珠は五百年前、悟空が悪戦して天兵の手に及ばなかつた時、老君が投げ付けた寶貝である。

青牛の妖怪獨角大王も、主人に向はれては敵はぬ、悟空が洞外に誘き出す處を、老君が芭蕉扇で一煽ぎ煽ぐ、力弱つて玉を投げ返し、本身を現はして鼻の穴へ索をとほされ、天上に曳いて行かれる、八戒沙僧師父共々に、洞の奥の方から助け出されて、李天王等に禮謝して別れを告げ、西へ行かうとすると、土地神が呼び留めて、

「三藏師父、大徒弟悟空殿が心盡くしの齋飯を御預かりして居りました、是を召し上つてお出なされ」と云ふ、見ると其鐵鉢からは暖げに湯気が上つて居る、悟空が如何云ふ譯だと聞くと、
 「師父が、大徒弟の御言葉をお守りなされず、自ら禰を曳き出された、拙者聊かの微意を以て、大徒弟のお骨折りを表し温めて置きましたでゝる。」

三十三 藏 孕 む

冬去り春となり、或る日一條の小川に来て、渡守りを呼ぶと、向ひの岸からお婆々の船頭が舟に棹して来る、渡り終つて、川の水が餘りに清浄なで、八戒と師父とが拘つて飲んだ、飲んでしばらく行く程に、兩人共急に腹が痛くなり出して、師父は馬上にたまらず、八戒は路の上に倒れ伏して、痛い苦しいと叫喚く、是非なく一軒の茅屋に訪れて、暫く休息し湯でも貰つて飲みたいと云ひ入れると、出て来るもの盡く老女で、四人を見ては適しげに笑つて居る、何をゲラゲラ笑ふのだと怒り付けても笑つて居る、湯でも呉れぬかと云ふと、湯では其痛みは治らぬと云ふ、如何したら治るか聞くと、子が生れたら治るだらう

乃子新尚



と云ふ、行者が驚いて聞き訊すと、婆々の一人が、

「此處は西梁女國と云つて、國中皆女人ばかりでムる、女人ばかりで子を産む方法は、彼の小川の水を飲むと必ず孕む事になつて居る、坊さん達も彼の水を飲まれたから赤子が宿つたのでムる、水を飲んで三日目に迎陽館の照胎泉と云ふに行つて、影を映すと、子が宿つたら影が二つになる、五六日のうちには貴僧方も産ますばなるまい。」

八戒是を聞いて大聲に泣き出し、

「産ますばなるまいと云つて、己達が何處から産まう、あ痛、あ痛」と頓び廻る、三藏法師も顔色青菜の如く、涙を流して倒れて居る、悟空が

「お婆々殿、此邊に墮胎薬を賣る家は無いか」と聞くと、

「墮胎薬などでは効が無い、此處から遙かの南の方は、解陽山破見洞と云ふがある、其處に落胎泉と云ふ井水があつて、是を飲めば、墮胎せるけれど、前方から此洞に如意真仙と云ふ仙人が棲んで居て、容易な事では人に汲ませぬとの事でムる」と云ふ、悟空が

「好し好し、それを聞いて安心した、師父、暫くお待ちなされ、其泉を汲んで参りませう」とハツと一聲雲に乗つて飛んで行く、婆々達は、雲に乗るとは神か佛かと、大いに驚いて、

手厚く三藏等を介抱して居る、悟空が破兒洞門に着くと、一人の道人が門外に居た、會釋をして、何卒水を汲まして呉れと頼む、道人が

「いやならぬ、國王とか大臣とかでさへ、お禮物を山の如く持参して、或は許さるゝ事がある位だに、貧乏行脚の素手ではかなはぬ、ならぬ、お師匠様に取り次ぐまでも無い、拙者が断る」悟空が推し返して、

「先づ其お師匠に云つて見て呉れ、己は孫悟空と云ふものだ、己の名を聞いたら、或は井戸其儘を呉れるかも知れぬ」道人がせん方なく洞門に入つて、孫悟空の名を云ふや否や、真仙忽ち大如意を把つて跳り出で、

「此處まで態々首を落しに來た孫悟空は汝か、火雲洞の悪事を覚えて居るか」と時りかゝる、悟空が

「火雲洞の事とは彼の紅孩兒の一件であらう」

「其の紅孩兒は、己の兄弟の牛魔王の息子だ、己には甥の敵」と打つてかゝる、

「其甥は觀音菩薩の弟子になつて居る、己が殺したのでは無い」と云ひ解いても耳にも入れずひた打ちに如意を振り廻すので、悟空も鐵棒を擧げて相闘ふ、十餘合にて真仙力疲れ、



洞中に逃げ入る、それに保はらず落胎泉の井戸に近づく、先刻の道人が居て遮り留める。追拂つて置いて釣瓶を下して汲まんとすれば、真仙が忍び寄つて、如意を脚にかけて引倒す、真仙を追ふと道人が来、道人を追ふと真仙が来、如何にしても水が汲めぬ、手傳ひがなくては埒があかぬと、再び以前の家に取つて歸して、沙僧を引張つて来た、真仙が懲りづまに邪魔立てするを、悟空が戦ひ戦ひ山の下に誘き出す、入れ替つて沙僧が井の傍に行くと、道人が棒を振り廻して防ぐ、沙僧が大喝一聲道人の左の臂を打折つたので、叫喚しながら逃げて入る、持つて来た瓶になみなみと靈水を汲んで、雲に乗り、

「兄貴水は汲んだ」と悟空に言葉をかける、真仙が焦燥つて打ち込んで来る、其の大如意を引奪くつて、二つに折り四つに折り、

「免し難い汝ではあるが、牛魔王の兄弟と云ふから、命を預けて置くぞ」と叱り付けて、共に雲を放つて歸つて来た。

待ち兼ねて居る三蔵が、匂ひ起きて一椀飲む、八戒も起き上つて、瓶から口うつしに飲むとすると、老婆々が慌てゝ留めて

「飛んでも無い事、それを一瓶飲んだら五臟六腑が皆溶けて下すまう」と云ふ。



一椀づゝ飲み了ると共に腹中大に鳴り下痢瀧の如く、漸くにして三夜八戒此の馬鹿々々しき厄難を脱れ得て、婆々達に禮をのべ、此家を立ち去つた。

三十一 西梁女國

西に歩む事半日はかり、一座の城市があつて、城門の額には迎陽關とある、其處等からワ
 イワイと集まつて来る老若、果して悉く女人のみだ、男珍らしさに前後左右に立ち圍み、
 前むも退くもならぬ、八戒が思ひ付きで、いと大きな猪頭を更に大きくし、耳を張り
 口を開いて、ワツと云つて跳り上ると、そりや妖怪と叫喚き叫喚き逃げ散つてしまふ、迎
 陽關の女役人が出て、姓名を訊ね關文を受け取り、關内に留めて置いて、朝廷に届け出で
 る、女の王様が是を見て、

「昨夜の夢見が好いと思ふたら、果して此僧は唐帝の御弟であつた、是は此儘此國に留め
 て、立て、國王となし、我は皇后となつて夫婦の談らひをせう」と都合の好い敎諭を下
 す、女大臣女役人等悉く大賛成で、早速女大臣が仲人となり、關役人と共に迎陽關に來
 る。

三藏法師は卒然の縁談に腹を潰して、

「決して仰せに従ふ譯には参らぬ、出家沙門の身で、西に行きて經を取る身で、固くなつて断る、八戒がしやしやり出て、

「女大臣殿、己の師父は出家の身で縁組は嫌ひぢやと云はれる、是は望みの如く西に行かせて、何と、拙者を留めて師父の代りになされぬか」と云ふ、悟空が苦笑ひして八戒を叱り退り、師父を小影に招いて、荒立ては事面倒と、ひそくと手段を私語さ、悟空から「恩命まことに忝ひなく承知するでムらう」と返辭した。

返辭を聞いて女王殿下は天に喜び地に喜び、直ちに宮中に大宴會の設けをなし、親ら龍車を急がせて迎陽館へ迎ひに来る、来て、三藏法師が例の金襴の袈裟、風采堂々として顔色清らかなるを見て、倍々悦びを加へる、八戒は女王の艶色を見て長い嘴に涎を絶たぬ。

三藏も致し方なく龍車に合ひ乗りして、宮中の大宴會に臨む、弟子達もお供して来て未座に居並ぶ、女王早速正面の玉座に三藏を坐らせやうとすると、三藏が

「いやまだ君は國王拙者は出家、願くは今日の大宴を果して、明早朝弟子共を天竺へ旅立たせ、是を城門外まで送り、然る後、大禮を取り結んで王位に昇りませう」と辭した、

八戒は早くも喰氣にかゝつて、五人前六人前の料理を平らげつゝある。

かくて其の夜は事無く明けて、朝早く弟子共は關文に印を貰ひ、西に向つて立出でる、三藏が見送りに立つと、女王も共に龍車に乗つて、諸司百官を従へ、城門外に出た、其時三藏が突然、龍車を降つて、女王に禮を行ひ、

「貧僧願くは是よりお別れ申さう」と云ふ、女王が青くなつて、それ留めよと立ち騒ぐ、悟空はかねて計つて置いた、定身の法を以て、君臣悉く一晝夜の棒立ちをさせ、其間に遠く逃げ延びやうと、將に口の裡に呪文を唱へんとする時、怪しむ可し、狂門窓に吹起つて煙塵濛々と立ち揚り、煙塵の中に物あつて、三藏を引捉へ、西北を望んで飛んで行く、そりや師父が捕はれたと、悟空等三人も亦馬諸共に雲を起して飛んで行く、女王等の驚くまい事か、彼の人共はすべて白日に昇天する、羅漢活佛の類であらう、佛様と縁を結ぶ譯には行かなかつたと、あきらめて王城へ歸り去つた。

悟空等は追つて行つて、一つの山に行き當ると、風やみ煙塵收まつて師父の行衛が知れぬ、雲を下りて山中を彼方此方見巡ると、青石屏風の如く立圍んだ谷の奥に、一窟洞あり、洞門には毒敵山琵琶洞と刻してある、此の中の妖怪が師父を攫つたものであらう、先づ中の

様子を探らうと、悟空が蜜蜂と變じて洞の裡へ忍び入る。

洞の中に花園あり花園の中に四阿あり、四阿の中には一人の美女が三藏法師と對坐して居る、三藏は涙ぐんで如何なる事かと悄氣て居る、美女は満面に笑を湛えて、

「和尚様、唐御弟様、此處は西梁女國の王城ほど、富貴の趣はありませぬけれど、閑靜で、和尙様には却つて住みよいと存じます、然るに無駄な御心配をなさらずに、妾と何日までも面白く暮さうではありませぬか、さあ何か召上れ、此の肉の方を上げませうか、此の甘い方を上げませうか」など、頻りに媚を呈して居る、三藏は、まだ徒弟等も跡を追つては來ぬやうだし、餘り腹立たせては勝手悪しと、せん方なく相手になつて居る、

「拙僧は出家の身であるから、その甘い方を戴きませう、貴女には此の肉の方を取りませう。」

其時雷の如き大音聲で、
「妖怪奴無禮をするな、己が來た」と呼ばつた、蜜蜂が悟空になつたのだ、鐵棒を押し取つて一打ちと美女に走りかゝる、美女も忽ち三枝の鋼叉を取つて、一息吹くと、例の煙塵濛々と四阿を閉ちかくす、闘ひながら洞門外に出ると、待ち受けて居た八戒が釘把を振つ

て打ち向ふ、美女の手が何本にもなつて、鐵棒と釘把をあしらひながら、ハツと身を翻すと共に倒馬毒を使つて、悟空の頭をチクと刺した、刺されて痛みに耐えず、頭を抱え棒を引いて逃げ出す八戒も逃げ出す、沙僧が居る山陰へ走り来て、あ痛あ痛と悟空が叫喚く。

三十二大 蝎

八戒がゲラゲラ笑つて、

「兄貴、平常は己の頭は鐵より堅い、火にも劍にも傷かぬと御自慢であつたが」と云ふ、

「いや不思議な妖怪だ、何の術を使つたのか知らぬが痛んで耐らぬ、あ痛あ痛」

「肝腎の御大將が手負ひでは戦も出来ぬ、今宵は此の山に野宿して、兎に角明日の事とせうではないか」と沙僧が云ふ。

洞中では美女の妖怪勝ちを得て喜び勇み、三藏を自分の圍へ引張つて来て、酒をすゝめ、肉を強ひ、如何でも夫婦の戯らひをせよと挑む、三藏法師は弱り果て、せん方なく、室の一隅に座禪を組んで、寂然と應答もせぬ、妖怪遂に焦燥れ出して、

「頑固坊主奴、痛い目を見なくば承知せぬか」と、縛り上げて洞の奥に吊して置いた。

夜が明けた、悟空が起き上つて頭を撫で、

「漸く痛みが薄らいで、今は只痒いばかりだ、さあ今日こそは始末をつける、先づ様子をみて来るから待つて居れ兄弟共」と再び蜜蜂となつて、洞中へ忍び入ると、師は洞の奥に吊されて居る、その圓い頭の上に留まつて

「師父」と呼ぶと、

「悟空か、何處に居る、早く救つて呉れ」

「師父の頭の上に居ります、今日こそはお救ひ申しませう、併し昨夜はお楽しみでムつたらう」と云ふ、三藏が齒を咬み鳴らして口惜がり

「悟空何を云ふ、如何なる妖怪が己を誘つたとて、己の禪心が動くと思ふか己の心は只、一日も早く天竺へ行つて、經を取りたいばかり。」

「天竺へ行つて經を取るとな」と妖怪が漸く目を覺ました、

「經を取るより、此處で樂みを取れとすゝめても、何故承知せぬ頑固坊主」ところ／＼起き出して來さうなで、悟空羽をかへして洞外に出で、本身に歸つて八戒を招くと、八戒が走せ來つて、大釘把を擧げて洞門を突き崩しにかゝる、音に驚いて妖怪が、例の鋼叉を提

げて現はれ、二人を對手に闘つた、闘つて居る間に、此度は八戒の唇の上をチクと刺した
 ワツと悲鳴をあげて逃げ出す、逃げ足にひかれて悟空も逃げ出す、以前の山陰へ八戒が願
 げ込んで、あ痛あ痛と叫喚き散らす、沙僧が、八戒を介抱せうとしてふと悟空の来る方を
 見て、

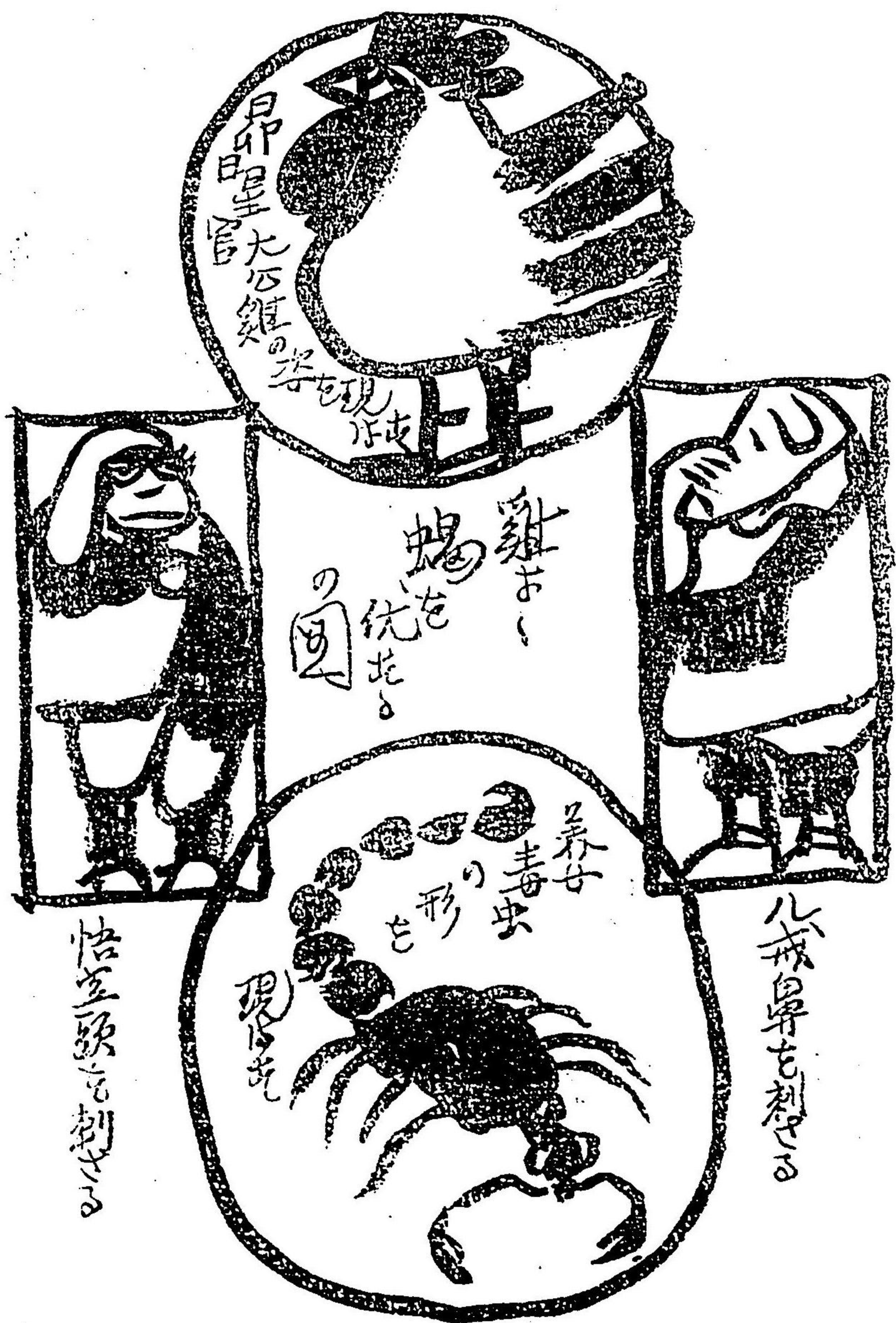
「兄貴、兄貴の背後から婆さんが来るは何者だ」と呼ぶ。悟空が振り返つて見ると忽ち、
 「兄弟共、観音菩薩を拜さぬか」と大地に跪く、
 婆さんに化けても菩薩は菩薩で、足に祥雲を踏みて空中に立ち、

彼の妖怪は蝎の老なるものである、人を刺すは彼の尾の尖で、其毒猛烈、我と雖も彼
 には近づき難い、彼を破るには光明天の昇日星を頼んで来ねばなるまい」と教へられた、
 そこで悟空が早速筋斗雲を飛ばして天宮に昇り、玉皇の許しを受けて、光明天の昇日星
 を頼んで下つて来た、八戒が

「昇日星、痛み處があるので御あいさつが出来ぬ、許して下さい」と云ふ、

「天蓬元帥、何處の痛みでうるか」

「いや彼の蝎の怪に刺されました」とウン／＼呻吟く、昇日星が其の大きな唇の上をよく



撫で、一息フーと吹きかけると忽ちに痛みが去る。悟空の痒い處も亦一撫で、治つて了ふ。

悟空八戒が洞門に攻め入る、妖怪が鋼叉を振つて迎へ戦ひ、また例の身を翻へさうとする。其手は喰はぬと二人が逃げ退く、追つて來ると入れ替つて、昴日星が現はれて、一聲大に叫ぶと、忽ち大いなる鶏となつた、また一聲叫ぶと、女怪力弱つて地上に倒れ伏す、倒れて琵琶程の大燭と本相を現はした、八戒の釘把が是を散々に突き碎く、星官は別れて歸り、師父の縛は解かれ、洞中は忽ち一面の火となりて、師徒四人再び西に向つて立ち出づる。

三十三 悟空三たび追はる

琵琶洞を去つて又幾日を亘つた、或る日白馬が動かなくなつた、八戒が「早く人家のある處に行かなくては、腹が減つてかなはぬ」と馬を追ふが馬は八戒の云ふ事をきかぬ、悟空が棒を振つて見せたら、馬が急に驅り出した、悟空は昔天上の御馬監に天馬を養つて居た事がある、すべての馬は甚だしく悟空を恐れて居る。

駆け出した馬は、三藏の方では留らず、ひたがけに六七里を駆け、弟子共とは遠く隔たつてしまつた、漸く馬が留まつて、三藏法師が汗を拭いて居ると、林の陰から三十人ばかりの強賊が現はれて

「坊主路銀を出せ」と云つた、

「路銀は跡から来る弟子共が持つて居る」と慄ひ慄ひ断ると、馬から引落して傍の立木に縛りつけられた、馬の跡を追つて悟空が先づ奔り来た、

「師父、如何なされた」

「悟空か、彼の強賊達が路銀を出せと云はれる、路銀を出してやつて、此の繩を解いて呉れ」三藏は飽くまでも柔和な和尚様である。

悟空が強賊の方へ進み出で、

「お盗人殿、師父から預かつた路銀は金十錠、銀二十錠ある、是は全然差上げるから彼の繩を解いて下され」そこで賊等が三藏を放すと、悟空が馬に乗せて、わざと元来た路へ向けて、

「それでは路が違ふ」と云つて跡を追ひつゝ走らうとする、強賊等がバラ／＼と悟空を逮

り留めて、

「小坊主逃げる氣か」と罵る、

「逃げる氣でもないが、實は己は路銀を持つて居ない、汝達の方に小遣ひ錢でもあらば、分けて呉れぬか」強賊の頭が怒つて、棒を上げて悟空の懸天を七つ八つ連打つ、打つまゝに平氣で打たせて置いて、鐵棒を取り直して一つ廻すと、頭領が一打ちに潰れる、又一つ廻すと次なる男が潰れる、其處へ八戒が驅けて来て、

「師父の仰せだ、人を殺してはならぬ」と留める、賊等も驚いて八方に逃げ散つてしまふ。

三藏は二人の死骸を回向して八戒に埋めさせ、心の中に悟空の殘酷を怒りながら馬を進ませる、夕刻になつて一軒の百姓屋に宿つた、主人の翁が善い翁で、心の限り師徒を接待する、三藏が、

「御老人には御家内衆は何人ムるぞ」と聞く、

「一人の伴と一人の孫がムります」と云ふ

「御子息にも御目にかゝつて今夜の御禮を申したい」と云ふと、老翁が

「いや伴奴は困り者で、今宅には居りませぬ、何の因果か悪心強く、盗人の群に入つて親に心配ばかりさせて居ります」と嘆息する。

三藏等も心の裡に、若しや晝間の盗人の中に此家の息子が居はせぬかと、案じながら奥の間に案内されて、眠りについた、夜半ばかりに門を騒がしく叩いて、二三十人で這入つて来た、果して此家の息子も晝間の盗人の仲間であつた、息子が腕を見ると、白馬が繫いである、忽ち一處に集まつてひそくと相談を始める、

「白馬があるからは、先刻の奴原が泊つて居る、寢息をうかつて頭領と朋輩の仇を討つてやらう」と、

老翁が是を聞いて、忍びやかに奥へ来て、四人に知らせ、裏門から逃がす、其の跡へ盗人共が咄と踏み込んで来て、

「逃げた逃げた」と、罵り合つて、裏門の開いてあるのを見付けた、其の内に東雲近くなる、三藏法師馬上にあつて、頭を回らすと、二三十人が槍刀を振り廻して間近く追つて来る、悟空が

「安心なされ師父、拙者一人で追ひ拂ひませう」と云ふ、三藏が



「悟空、悟空、必ず彼等を殺してはならぬぞ、只威かして追ひ拂へ」と言葉をかけるうちに、早悟空が棒を振つて三十人の真中に飛び込んだ、殺を好む悟空の棒が動く毎に、殺を好まぬ三藏はハラ／＼して是非なく念佛を唱へて居る、頃刻の間に半分は逃げ散り、半分は打倒された、倒れた手負を引き起して、彼の老翁の伴は居ぬかと訊すと、矢張り其處に倒れて居りますと云ふ、忽ち落ちたる刀を拾つて、惡慧子の首を掻き落し、三藏の前に持つて来て見せた、

「不孝の逆子の首を御覽じろ師父」

三藏が涙組んで怒り出した、

「悟空、汝は身に若干の神通ありながら、何の爲めに無益に人の血を流したか、師弟の縁を切つてやる、さかぬ、さかぬ」と叫びながら例の緊箍咒を念じ續けた、悟空は頭を抱えて地上に悶倒し、

「許し給へ許し給へ」と叫ぶが、斷じて許さぬ、

「早く立去らねば何時までも念じるぞ」と云はれて、悟空もせん方なく、雲を起して飛び去つてしまつた。

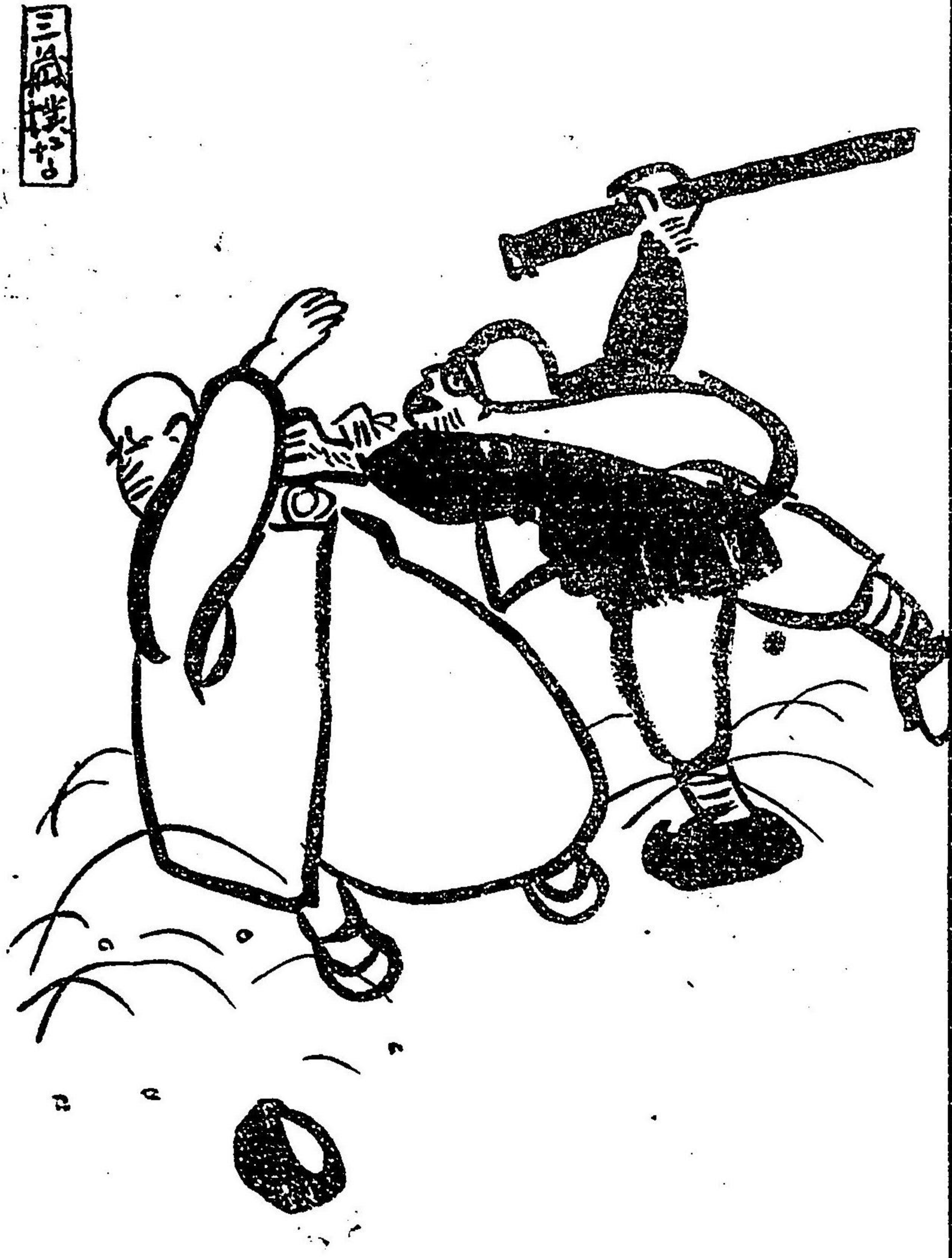
三十四 偽悟空

悟空は花果山指して飛んで行つたが、途中でまた考へ直した、師父に勸當されて歸つて来たとは、如何やら手下の猿猴共にも云ひ惜い、是は観音菩薩の處へ行かうと、筋斗雲を回らして、南海に飛び來り、菩薩の前に跪いて、聲を放つて大哭した、菩薩が善財童子に扶け起させて、

「悟空、如何なる事が起つたか」と問ふ。悟空が強盜を打殺した事から師父が怒つて勸當をした委細を話して

「菩薩の御恩によりて、五行山の難より脱れ、西天竺に行く道も半過ぎましたが、功ありて認てられず、故なき怒を蒙りて、軽々しく師弟の誼みを断れたのが、拙者には耐えられぬ無念な事で、何卒此の頭金の縋を取り去つて下され、今より元の古巢に歸つて、心安く日を送りたうムりまする」菩薩が是を聞いて

「如來は我に、金縋を取り去るの呪文は教へ給はなかつたから、汝の頼をかなへて遣る譯には行かぬ、而も三藏が怒つた事は佛家の常道左もある可き事で、汝の殺伐な所業にこそ



三藏

大いなる罪は存する、先づ〜我の處に遊んで居なさい、其内師父の心の和ぐ時が来やうから。」

三藏法師は悟空を追ひ拂つた後、十里程歩いて、晝飯時分となつた、八戒が鐵鉢を持つて雲に乗つて其處等見巡ると、彼方に一軒の茅屋あり、茅屋の門に一人の老婆が出て居る、そこで變じて黄色な法衣の肥り坊主となつて行つて飯を貰ふ、彼是と手間取つて中々歸つて來ぬので、待ちあぐんだ三藏が、此度は沙僧に水を汲みに遣つた、是も中々見付らぬと覺しくて急には歸つて來ぬ、處へ何處からともなく悟空が現はれて、

「師父、拙者が水を持つて參りました、先づ是を召し上れ、其内飯も求めて來ませうから」と云つた、三藏がそれには目もくれず、

「汝の如き亂暴者の水は飲まぬ」と斷る、

「然んなに云はれても、拙者無くば西天には行けませんまい」三藏が怒つて

「行けても行き得ぬでも、汝の知つた事か」と罵る、此度は悟空が怒つて、

「此の頑固坊主、最早許さぬぞ」と鐵棒を擧げて一打ち脊中を喰はした、アッと叫んで三藏が昏倒すると、置いてあつた二つの荷物を掻き握つて、また何處ともなく飛んで行つて



しまった。

良久うして八戒と沙悟淨が同時に歸つて来て、大きに驚き、種々の介抱すると漸く人心ついで、悟空の狼藉を物語る、兎も角も養生手當をした上でと、馬に揺さのせ以前の茅屋に來て、老婆に頼んで息ませて貰ふ。

擡つて行かれた荷物の中には、大事な關文が入れてある、沙僧がそれを取り戻しに行く事になつた、悟空が飛べば片時の間であるが、沙僧が雲では三晝夜かゝる、花果山に着いて見ると、水簾洞の前に果して悟空あり、多くの猴共を集めて、彼の唐朝の關文をば聲高に讀んで居た、分別者の沙僧は、初めから事を荒立てぬ、進み寄つて禮をなし

「師兄、先日は師父が腹立ち紛れに、師兄を追ひ放たれたが、今は心も和いで居られる、師兄も年來の情を思つて、奪ひ來つた荷物を持つて、再び師父の許に歸りなされぬか、若し又此山に住むを樂しと思はれるなら、何卒彼の荷物だけは返して下さらぬか」悟空が是を聞いて冷笑ひ

「己は然様師父を持つた覚えは無い、己は己で己の師父がある、くれ子猴共、師父をお呼び申せ」と云ふと、小猴共がやがて師父を導いて來た、是は如何に、亦是れ一人の三蔵一

人の八戒一匹の白馬、一人の沙僧淨さへ居るので、沙僧憤りに耐えず、忽ち飛びかゝつて彼の沙僧を打殺すと、即ち一個の猴の化けたものであつた。

彼の悟空が怒つて棒を廻して打ち向ふ、幾多の猿猴が手に手に兵器を擧げて取り圍む、沙僧右に支へ左に避け、漸く一方の血路を開いて逃げ出したが、思案に能はず、直ちに南海の觀音菩薩の許に飛んで行つた、木叉が出迎へて、

「沙僧淨は何用事あつて此處へ來られたか」と聞く、

「容易ならぬ出來事の爲めに、菩薩の御助けを願ひに參りました」と云ふ、菩薩の前に案内されて行く、と見ると菩薩の座下に悟空が居た、驚き怒つて寶杖を振つて打つてかゝる

菩薩が

「沙僧手を動かすな、何故に兄弟子を打たうとするか」と云ふ、沙僧が大息吐いて、悟空の狼藉から、水簾洞の光景を物語り、

「猴奴は素早く筋斗雲を使つて、拙者の先廻りして、菩薩には勝手の宜い様に申したのであらう、斷じて許す可らざる惡者だ」と罵る、

「沙僧、それは汝の誤りぢや、悟空は此の間此處に來てから少時も此處を離れぬ」と菩薩

が云はれる、沙僧よりも悟空が不思議がつて、此度は沙僧と共に花果山を指して飛んで行く。

三十五 偽悟空の二

水簾洞に来て見ると、成程此處にも一人の悟空が、三藏八戒等と群猿を集めて洞前に酒宴して居る、

「此奴偽者」と悟空が鐵棒を振つて打ちかゝる、

「此奴偽者」と彼方の悟空も鐵棒を振つて打ちかゝる、沙僧は、南海から来るまでは、同行して居るのが真者で、洞前に居たのが偽者と思つて居た、處が兩方で棒を振り廻して、空中で上になり下になりして戦つて居る間に、何方が真者やら偽者やら、見分けがつかずなつてしまつた、何方に加勢して好いやらサツパリ分らぬ、鳥數々々して居ると、

「沙僧、此處に關はず、早く師父の許に行つて、師父を守護して居なさい、己は今から此奴を引張つて、南海の觀音菩薩の處に行く」と一人の悟空が叫ぶ、一人の悟空も亦同じやうな事を云ふ。

二人の悟空が、黒雲の渦巻く如くに戦ひながら、南海落伽山に飛んで来た、木叉善財の二人が是を引分けて、菩薩の處に連れて行く

「願くは菩薩の法力を以て、此の偽者を」と一人が云ふと又

「願くは菩薩の法力を以て此の偽者を」と一人が云ふ、どれが偽者かは觀音様にも見定められぬ、例の緊箍呪を唱へて見ると、二人共顛り廻つて

「あ痛あ痛」と叫ぶ、菩薩もせん方なく、

「汝は昔、天宮を鬧がした事があるから、天宮の中には鑑別する者もあらう、天宮へ行け」と云はれる。

また戦ひながら天宮に昇る、天宮の神達が驚いて引分けて、李天王の照魔鏡を持つて来て見たが此處でも更に分別がつかぬ、玉皇が、

「斯かる得體の知れぬもの、爲めに、天宮を亂されてはかなはぬ、早く下界へ追ひ下せ」と云ふ。

沙僧が三藏の居る茅屋に歸つて来た、行者悟空が二人になつたと云ふ話を聞いて、三藏八戒が大きに驚いて居る處へ、狂風頓かに吹き起り、互に罵り叫ぶ聲雷の如く、二人の悟空

が圍ひながら、空中より降りて来た、沙僧が、

「師父、例の緊箍呪を唱へて御覽じろ、痛まぬ方が偽であらうから」と、八戒と共に兩人を引き分けて、師父の前に連れて来る、三藏が口の裡に呪文を唱へると、兩人共地上に閃

到して、

「許せ許せ」と叫ぶ、念じやむと起き上つて、物凄き圍を續けつゝ、

「兄弟共、師父を守護して居れ、今から閻魔王の前に出て、判別して貰つて来る」と同音に叫んで、忽ちの間に見えすなつた、八戒が、

「沙悟淨、奪はれた荷物は如何したか」と聞く

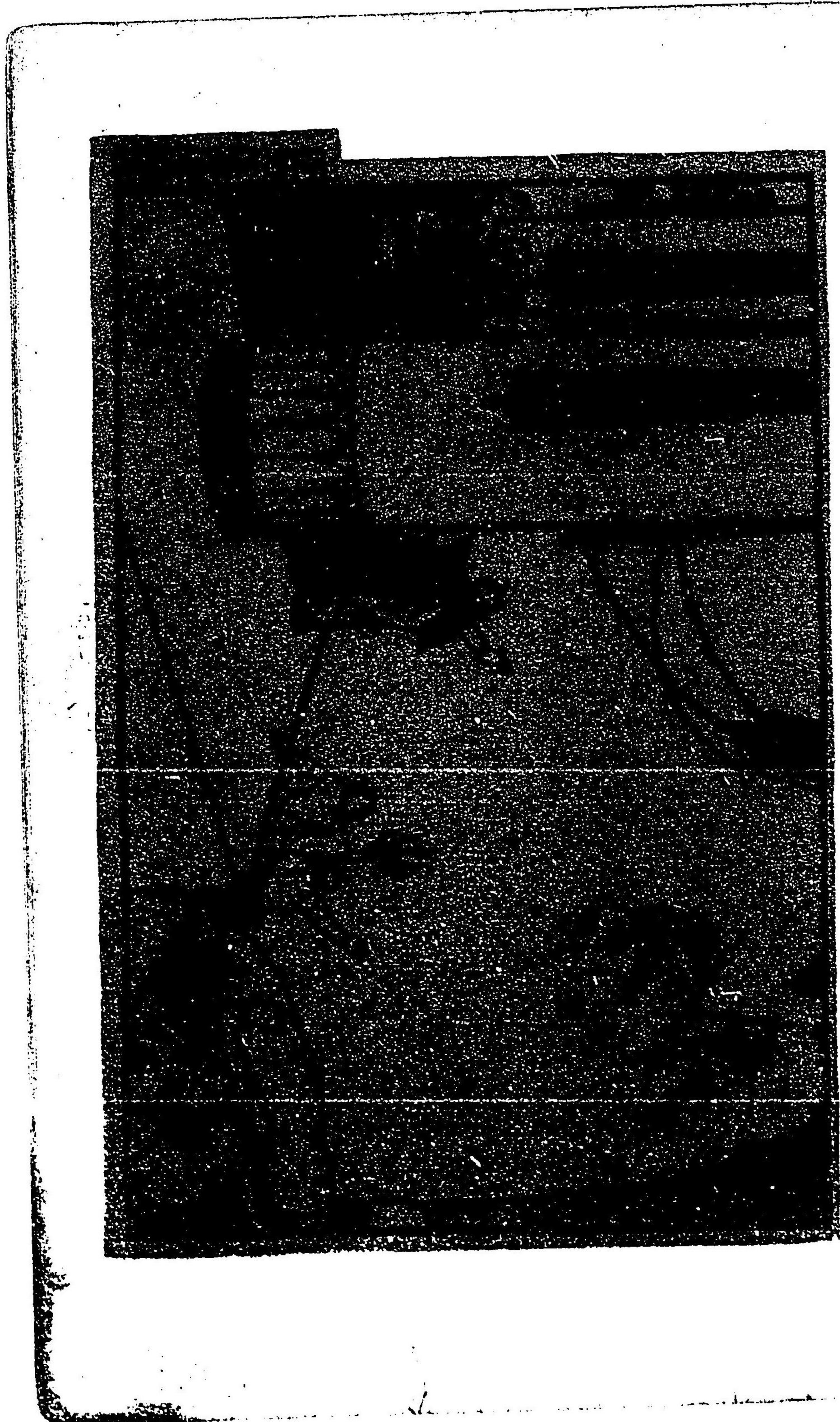
「二人が争つて居る間に、其處等探して見たが、荷物は見えなかつた」と云ふ

「いや、それは汝が不案内であるからだ、彼處に瀧が落ちて居るだろ、瀧の裏に洞がかくれている、必ず彼の荷物は、瀧の裏の洞の奥に置いてあるに相違ない」と八戒が云ふ、

「二哥、汝が取りに行つて呉れるか」

「よし、己が行つて取て来やう」八戒が此度は釘把を提げて飛んで行く。

二人の行者は汗になつて圍ひつゝ地獄の閻王宮に荒れて来た、刀山血池の牛頭馬頭共が、



是を見て驚き恐れて逃げ廻る、閻魔王が二人を制し留めると。

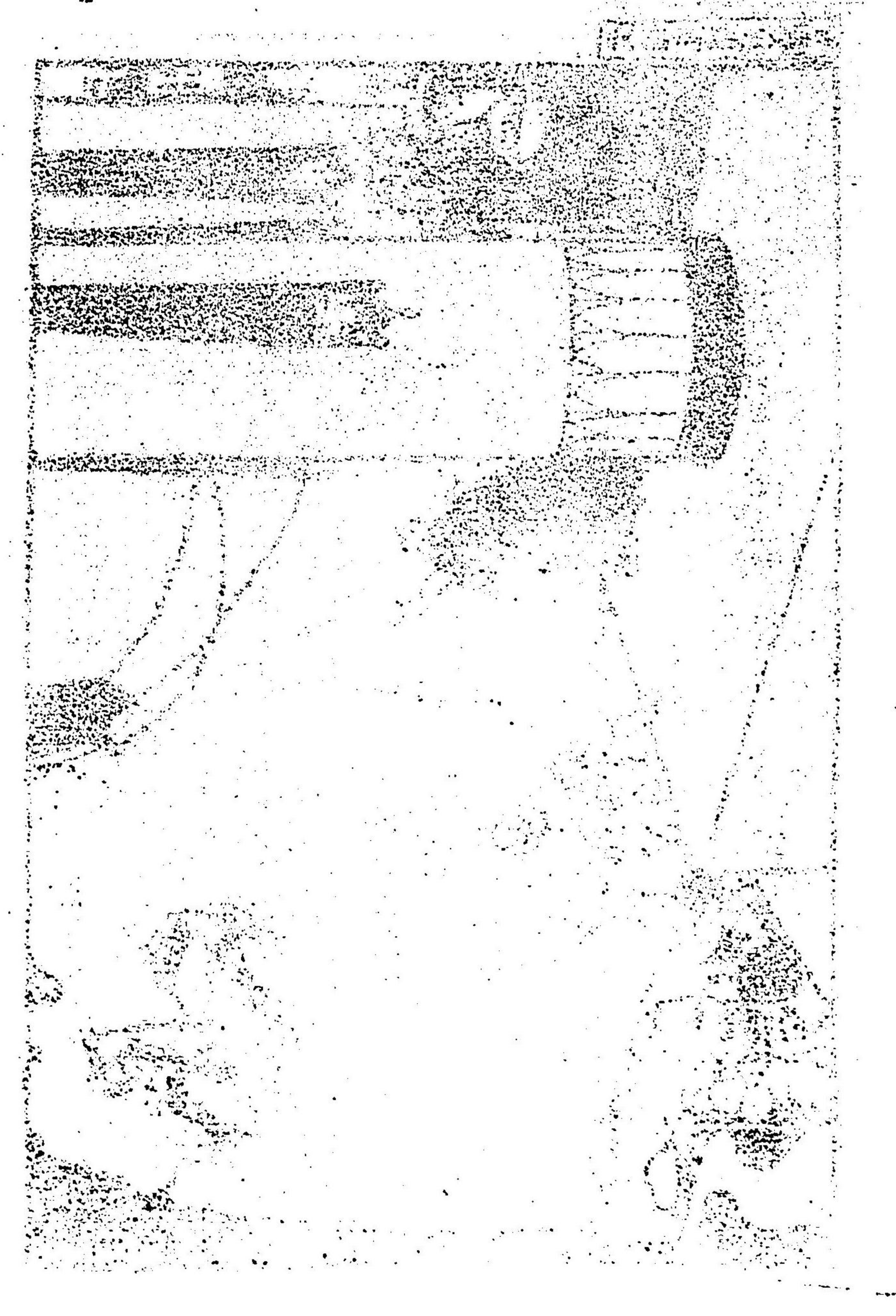
「何卒、地獄の帳面に照して、此の偽者の魂を奪ひ去つて下され」と同音に叫ぶ、帳面を
查べても當りがつかず、淨玻璃の鏡も役に立たぬ。地藏菩薩の乗りもの、獸は、天下の事
を一目で知ると云ふので、それを曳いて来て見せると、腮を地へつけて暫く見て居て、略
根原は分つたが、此處では云はぬ、西天竺の釋迦如來に聞くがよいと云ふ。

西天大雷音寺に於て、釋迦如來が、菩薩阿羅漢、比丘比丘尼を集めて説教をして居る。處
へ、二人の悟空が一團となつて、咆え啼り相闘ひつゝ、飛んで來た、四大金剛が中に入つて、
如來の前に引据ゑる、其處へ南海の觀音菩薩が來た、如來が

「菩薩、汝にも此の眞偽は分らぬか」と問ふ

「弟子の眼では得分りませぬ」と云ふ、

「菩薩、汝は天地間のすべての物は知つて居らるゝが、すべての種類を知らぬ、天地間の
ものゝ、種類は、天地神人鬼と、羸鱗毛羽昆との十類に分れて居る、其外に列るものに四
猴と云ふがある、第一は靈明石猴次に赤尻馬猴、第三は通臂猿猴、第四は六耳獼猴である、
今此の偽悟空を見るに、第四の六耳獼猴と我は知つた」と云はれる、偽者悟空が本身を三



ひ當てられて、驚き慌て、逃げやうとする。羅漢等が取り圍んで居るので逃げられぬ、變じて蜂となつて飛び上る處を、如來が鐵鉢を投げて中に伏せてしまつた、然うとは知らず皆々が、何處彼處と探し廻るのを、如來が留めて、

「偽者は決して逃げられぬ、此の裡に伏せてある」と鐵鉢を上げると、蜂が自身の六耳彌猴となつて立上る處を、眞悟空の鐵棒が糊の如く打ち潰してしまつた。

「此上は拙者の金縷を脱いで下され、山へ歸りますから」と悟空が云ふのを、如來が懇ろに教訓して、觀音菩薩に送らせる、三藏法師の茅屋に歸つて來ると、折よく八戒も花果山から歸つて來た、偽三藏偽八戒を打殺して見たら、矢張り、猿の化けたものであつたと云ふ。

三十六 火 焰 山

夜泊し晝歩んで、夏去り秋風の吹く頃となつた、秋であるのに歩むに従つて暑さが増して來る、如何云ふ譯か、斯様云ふ譯かと評議しながら行くと、一軒の大きな家があり、一人の老人が門前に立つて居る、此處に宿を頼んで、さて日を追つて暑くなる譯を問ふ、老人

「此村を去る事西に六十里にして、火焰山と云ふがある、廣さ八百里、五百年前より斷えず烈々たる火が燃えて居る、貴下方が假令鐵石の體でもとても西へは行けません、近邊數十里の間は全く春夏秋冬の節が分らず、草木も十分には茂り得ませぬ」と云ふ、

「然らば五穀を作るには如何なる」と悟空が問ふと、
「春種蒔き秋收むる間は、鐵扇仙人の處へ、禮物を厚くして、其の寶貝の芭蕉扇を借りに行き、芭蕉扇の功德は、一度煽げば火息み、二度すれば風生じ、三度すれば雨降る、ここ

で秋の收穫が果てると、また禮物を持って返しに行きます」
「其鐵扇仙人は何處に居らるか」と悟空が問ふ、
「此處より遙かに西南に當つて、翠雲山と云ふ山があり、其山の芭蕉洞と云ふに棲んで居られます。」

「好しく、それなら其扇を借りて來やう」と直ちに雲に乗つて飛んで出る、老人が驚いて、
「和尚様方は凡人ではなかつた」と懇ろに接待して居る、悟空は翠雲山に着いて、雲を下



り、其處此處と探し廻る時に、一人の杣に出遇つた、

「鐵扇仙人の芭蕉洞は何處か、知つて居るなら教へて呉れ」と云ふと、

「芭蕉洞は彼處にあるが、鐵扇仙人と云はぬ、鐵扇公主と云ふが棲んで居る、別名は羅刹女牛魔王の御家内ぢや。」

是を聞いて悟空が心の内に困り果てた、牛魔王と羅刹女は、例の紅孩兒の親である、此の破兒洞の仙人奴も、紅孩兒をば悟空が殺したと思つて水を與へなかつた、況んや親達なら、到底扇を借りる處の沙汰ではあるまいと思つた、併し乍ら已むを得ぬ、杣に別れて芭蕉洞門外に立ち、

「牛魔王夫婦に會はふ、兄弟分の孫悟空が來た」と云つた、羅刹女が孫悟空の三字を聞くと否や、果して妻じき見脈で現はれた、

「悟空の悪人は何處にある」悟空が笑みを含んで

「嫂々久しくお目にかゝらなかつた」羅刹女が眞赤になつて怒つて

「誰が汝の嫂々なものか、己れよくも吾子を殺し居つた」悟空が益々叮嚀に、

「それは嫂々等の思ひ違ひであらう、昔は牛魔王と相結んで兄弟となつた拙者で、何の故

にか子息に害を加へやうぞ、しかも子息の神通廣大にして、我が師父を捕へ、中々拙者の手に合はなかつた、幸に観音菩薩の助をかりて、子息も佛法に歸し、今は善財童子と呼ばれて南海に居られる、實は拙者も先年來佛法に歸し、經を取りに行く師父を守つて西に行くのちや、此度火焰山を越え兼て、嫂々の芭蕉扇を借用に來た、昔馴染に貸して下されぬか」羅刹女は耳にも入れず、

「惡猴奴、無駄口さかすと首を渡せ」と叫んで斬つてかゝる、悟空が棒を擧げて受け留め

「嫂々芭蕉扇を貸して呉れぬか」

「貸さぬ」

「貸さずは己、此の棒を喰へ」

劍と棒と相闘ふ事良久しく、既に日暮に及んだ、羅刹女支へかねて退きながら、ひそかに腰なる芭蕉扇を抜き取つて、サツと悟空を煽ぐと共に、驚く可しきもの悟空、天空遙かに舞ひ上り、大風の塵を吹くが如くに、飄々蕩々として、一夜の間飛ばされた、夜明けの頃漸く一の山に落ち留まつて、暫く心を鎮め、さて四下を見廻すと、如何やら見覚えのある山である、よく考へて見ると、曾て黃風怪を退治る爲めに、靈吉菩薩を頼みに來た、小

須彌山であつた、さらば靈吉菩薩に會つて、相談せうと、菩薩のお寺に訪ねて行つた、菩薩が孫悟空と見て、

「大聖、經を取るの事は了はれたか、愛度い」と云ふ、

「いや中々、未だ途中で難儀をして居ります」と火焰山の火や羅刹女の扇の話をする、菩薩が、

「あの扇は恐る可き異寶である、一度煽げば人を吹き送つて八萬四千里の遠きに飛ばす、彼處と此處は隔つる事五萬里、大聖なりやこそ五萬里で留まつたのちや、幸ひ我が寶貝に一箇の定風丹がある、是を持つてさへ居ればいかな芭蕉扇も遮團扇と等しい、貸て上げやう。」

羅刹女は、勝を得て洞中に歸り入り安らかに眠つて、あくる日となつた、忽ち洞門外で

「孫悟空が復來たぞ、芭蕉扇を貸さぬか」と大聲に罵る、羅刹女が驚いて、

「悪猴が流石に侮れぬ手段を持つて居る、此度こそは、幾煽ぎもして、立歸られぬ程に飛ばしてくれう」と劍を振つて立現はれ、戦ふ事七八合、忽ち例の扇を出して、三つ煽ぎ四つ煽ぎ七つ八つ煽いでも、悟空は仁王立になつて平氣な顔をして居る、羅刹女甚だ膽を潰

して、洞の中に逃げ入り、洞門を緊と閉して、汗を拭ひ息をやすめ、手下の女怪に茶を立てさせて一二椀飲んだ。

「一二椀飲むと、

「嫂々扇を貸さぬか」と身近く悟空の聲がする、再び驚いて其處等見廻すが影もない、

「扇を貸さぬか」とまた云つた、

「悟空、汝は何處に居るのか」と怯々もので叫ぶと、

「汝の腹の裡に居る、今は茶を飲まれたやうだから、茶受けを上げやうか」と云つた。

三十七 芭蕉扇

羅刹女が洞へ逃げ入るあとから、悟空は羽蟲となつて飛び入り、茶を飲む時の隙をうかいつて、茶の泡の中に潜み、茶と共に腹の裡に下つて居たのである、

「茶受を上げやうか」と云つて、ウンと足を延ばした、羅刹女がアツと叫んで卓子を蹴返し床の上に悶倒した、

「茶受が濟んだら茶を上げやう」と云つて手を延ばした、羅刹女は死ぬばかりに苦んで

「大聖、お助けお助け」と呻吟く、
「扇を貸すか」と云ふ

「貸します」と呻吟く、扇を出さして置いて、口を開かせてまた羽蟲となつて飛び出で、芭蕉扇を受取つて勇み喜んで歸つて来た。

待ち兼ねて居た三藏等が、共に炎熱を冒して火焰山近くへ行く、悟空が先に立つて、芭蕉扇を把つて一煽ぎすると、こは如何に、煽の勢以前に倍した、また一煽ぎすると、煽の高さ百丈となり、凄しく燃え上つて来る、此度は奈何かともた煽ぐと、更に烈しく燃えさかつて、直ちに四人の頭の上に覆ひかゝつた、かなはぬ逃げよと、狼狽へ廻つて漸く山かげに走り退く、處へ一人の男が、従者に食物を持たして現はれた、

「拙者は此山の土地神でゐる、大聖様方に齋飯を献じませう」と云つた、

「此の火は何時になつたら消えるのだ」と悟空が聞く、

「芭蕉扇さへあれば」と土地神が云ふ、

「芭蕉扇はあるが、此の通りの始末だ」と土地神が笑つて

「此の扇は偽物でゐる大聖は羅刹女に欺かれたのでゐらう牛魔王から真物の扇を借らす

ば、婿が明きますまい」と云ふ。

「一體此火は牛魔王が放つたものか」と悟空が問ふと、土地神が

「いや大聖、貴下が放つたものでゐる」

「馬鹿を云ふな、己は放火はせぬ」と悟空が怒る、

「大聖、貴下は知らぬ、此處には元山はなかつた、五百年前に大聖が、天上の八卦爐を踏み破られた時、八卦爐が落ちて此山となり、八卦爐の火が此の火となつたのでゐる、其時拙者は太上老君の配下で其の爐の火焚きであつた、大聖の連累によつて、官を貶されて此の山の土地神となり、火が消えぬうちは元の官に歸れぬ事となつて居るのでゐる」と云ふ

「牛魔王は今何處に居るか」

「牛魔王は此頃積雷山摩雲洞に居る様子でゐる、摩雲洞には元、狐の王が棲んで居たが、其王が死んで跡には玉面公主と云ふ一人の娘を残しました、娘は牛魔王の強勢なるを頼みとし、牛魔王は娘の艶色を愛し、羅刹女を捨て置いて、専ら玉面公主と樂みを共にして居ると聞きました。」

積雷山摩雲洞の玉面公主が、洞門外に逍遙して居る處へ、悟空が出會した、玉面が驚いて

洞中に逃げ入り、

「今、門外に毛深い恐ろしげな和尚が迂路々々して居りました」と牛魔王に告げる、牛魔王が何者かと、鐵棍を把つて立出でると、悟空が腰を屈めて

「牛魔王兄弟久しくお目にかゝらなんだ」と云ふ。

「倅を殺して置いて、兄弟もあるものか」と怒る、斯く／＼の次第で、決して殺した譯では無い、寧ろ禮を云はる可き筈であるから、怒らずに羅刹女にも云ひ付けて、芭蕉扇を貸して呉れと、事を分けて話しても受け引かず、此の鐵棍を喰つてから物を云へと、打つてかゝる、兩人の手腕正に相等しく、戦ふ事百餘合、更に勝負の色が見えぬ、處へ山の上から

「牛魔王様、我が主人が先刻からお待ち申して居ります」と呼ぶ者がある。

そこで牛魔王が洞中に退いて、玉面公主に、

「安心して留守居して居れ、悟空奴は己の鐵棍を受け兼ねて退いたから、己は今から友達の酒宴に臨かねばならぬ」と云ひ渡し、壁水金睛獸に打跨りて、雲霧を起して出かけた、悟空が是を見張つて居て、一陣の清風と變じて後を跟けて行くと、山間の谷に来て、フツ

牛魔王の洞窟



と見えなくなつた、さては彼奴を招いたのは水中の怪物に相違ないと、再び變じて蟹となりて水底に潜り入る、水底却つて水なく、一座の邸宅があり門に題して亂石山碧波潭とあつた、門内に匂ひ入ると、正面の大座敷に牛魔王が、老龍蛟精等と酒を始めて居る、忽ち一計を案出して、門前に繫いだ金睛獸に打跨り、牛魔王に化けて谷を出で芭蕉洞に来る。羅刹女は、久しぶりで牛魔王を見て大きに喜び酒を酌んで、いろ／＼怒みつばい怒海を云ふ、僞牛魔が、

「時に此頃聞けば、伴の仇の孫悟空が近邊に立ち廻るさうだから、よく手筈をきめて置いて、打殺して恨みをはらさねばならぬ」と云ふ、

「其の悟空には昨日既に酔い目にあつた」と腹に這入られた事やら、僞扇を渡した事やらを話して

「是を云ふのも、大王が古きを忌み新らしきを愛で、本妻の此處へは寄りも付かぬから」とと焼く、僞牛魔が甘い事を云つて慰め慰め、

「僞扇の計は巧く行つたが、彼奴の手段は尋常でないから、また来て扇を盗まうとも知れぬ、眞の扇は何處に藏して置いたと聞くと、羅刹女が笑つて、口から銀杏の葉位の扇を吐



き出した、偽牛魔が手に把りながら、
 「斯んな小さな扇が、八百里の火焰を消し得るか」と云つた、羅刹女は酔つて居るから氣
 がつかず、

「大王は玉面公主の色に溺れて、酔く物忘れになられた、是を大きくせうとならば、左の
 拇指で、柄の處を押えて、咄嗟阿吸嘻吹呼、と呪文を唱へさへすれば、忽ち一丈二尺とな
 るではありませぬか」と云つた
 云ふと共に牛魔王忽ち變じて悟空となり、芭蕉扇を取るより早く洞外に奔り出る、羅刹女
 は酔もさめ果て、呆然としてしまふ。

三十八 牛魔王

碧波潭の宴會が終つて、牛魔王が歸らうとすると、門に繋いで置いた金睛獸が居ぬ、何者
 か來はせなかつたかと、訊ねると、先刻蟹が一個門内へ這入つたばかりですと、門番が云
 つた、牛魔王が忽ち悟つて、扱ては彼の猴奴が小刀細工を用ゐたなど、急ぎ芭蕉洞に來て
 見ると、果して金睛獸が此處の洞門に繋いである、最早實は奪はれたらうと急ぎに急いで



「羅刹女、猴奴は如何したか」と叫び、奥へ通る、奥では羅刹女が呆然として居たが、牛魔王を見て胸を撲つて口惜し泣きに泣き倒れ、

「此の間拔親爺殿、自分の駒を奪はれ、自分の姿に化けられ、自分の女房を馬鹿にされ、自分の寶貝を盗まれて」と叫喚く、牛魔王勃然として憤り、

「果して芭蕉扇を持つて行つたか」「持つて行つたとも、大手を振つて」とまた叫喚く、

「好しく心配するな、直ぐ様取り返して来るは。」

悟空は芭蕉扇を奪ひ得て、喜びに耐えず、途すがら例の呪文を唱へて見ると、成る程見る見る一丈二尺の大扇となつた、併し是を元の形に縮める呪文を教はらなかつたので、大扇を肩に擔いて急ぎ行くと、向ふから八戒が来た、

「師兄、師兄のお歸りが遅いで、師父が案じて拙者を迎ひに遣はされた、扇は手に入つたか」

「手に入つたとも、是れ此の通り、」
「成る程お手柄、どれ拙者が擔いて行きますせう」それならと扇を八戒に渡す、驚く可し八

戒が、扇を受け取ると牛魔王になつた。

「悪猴、己だ」悟空が煙の出る程怒つて、棒を振つて打ちかゝる。牛魔王が二三歩退つて芭蕉扇を取り直して、八萬四千里を吹き飛ばさうと、煽いだ、那んぞ知らん、悟空には定風丹がある、仁王立ちになつて、平氣な顔をして煽がせて居る。牛魔王が大さに惚て、呪文を唱へて扇を小さくし口の裡に含み、寶劍を振つて切つてかゝる。

三藏法師は火焰山の麓に待ち詫びて、口が渴いて耐らぬ、土地神に

「牛魔王の力は如何様ものか」と聞くと、

「左様、正に孫大聖と好い敵手でムらう、今迄お歸りが無いのは、必ず戦の最中と存じます」と云ふ、

「然らば八戒行つて師兄の助けにならぬか」と命じられて、八戒釘把を携へ土地神を案内にして翠雲山に来て見ると、何様牛魔王と悟空とが、火花を散らして相撃つて居た、

「師兄、拙者が来たぞ」悟空が振り返つて八戒を見て、戦ひながら、牛魔王が八戒の偽者となつた事を告げる、八戒が劫を煮やして透二無二釘把を振り廻す、牛魔王は悟空と長く闘つて、やゝ疲を覺ゆる處へ、新手が加はつたので、隙を見て逃げ出し、摩雲洞に奔り込ん

だ。後を追つて来ると、早くも堅固な洞門を緊々と閉してある、八戒が馬鹿力を出して、釘把を以て洞門を打ち破りにかゝる、牛魔王は、玉面公主に戦ひの有様を話して居たが、洞門を壊されてはかなはじと、再び鐵根を拿つて現はれ出た、悟空八戒が左右から引袂んで攻めつける、暫く戦つてまたも洞中へ逃げ入らうとすると、土地神が陰兵を率ゐて洞口を遮つて居る、後からは悟空八戒が追ひかゝる、進退極まつてフツと身を隠してしまつた、八戒土地神が

「何處へ何處へ」と探し廻ると、悟空が笑つて、

「牛魔王は空中に居るぞ」と云ふ、八戒が空を眺めて、

「居らぬ居らぬ、居るのは天鷲が飛んで居るばかりだ」

「彼の天鷲が牛魔王だ、待て〜己が追つて見やう、汝達は洞中へ打入つて、女怪や手下の小怪を狩り盡くせ。」

飛んで居る天鷲の上から、忽ち一羽の海東青が翼を展べて飛びかゝつて来た、天鷲の牛魔王が、それを悟つて、急に變じて青鸞となつて、逆に海東青を引き裂かんとする、海東青

の悟空が、然うはならぬと、變じて鳳凰となつて黄鷹を叩き落さうとする。鳳凰は鳥の王である、此の上には變化の術が無い、黄鷹鳳凰と見て急ぎ地上に飛び降り、一隻の香樟となつて知らぬ顔して草を喰つて居る、草を喰つて居るのが牛魔と見て、悟空も亦地上に降り、變じて大虎となつて、香樟に掴みかゝる、香樟すかさず化じて金銀花斑の豹となる、牛魔が豹となると悟空が狡狴となる、狡狴を喰ひ殺さうと大熊になる、大熊を捲き倒さうと大象となる、是に於て牛魔王大いに笑い、遂に本身を現はして一隻の大白牛となつた、蹄より脊に到つて八百丈、首より尾に到つて一千丈、

「悟空、己を何とする」と呼つた、聲は洪鐘百千を撞くがやうである、悟空是を見て同じく本身を現はし、腰に手をあて、ウンと延びると身の丈一萬尺、擎天の柱の如き棒をあげて、打ち下すと、白牛が其の鏡塔の如き兩角を以て受け留め、互に呼はる聲は震雷をなし、驚天動地の大闘戦を始めた、此の聲に驚かされて、三藏守護の神達が奔々と集まり來り、次第々に牛魔王を取り圍む、牛魔王勝ち難きを知つて、再び元の姿に變じ、芭蕉洞に逃げ籠る、悟空も法相を收めて、追つて洞口に行くと、八戒等が摩雲洞の玉面公主を打殺して引上げて來た、二人力を合せて洞門を打破ると、牛魔王此處にも居た、まらず、大

に叫んで打つて出で、一方の血路を開いて北を望んで奔ると、北には五臺山碧摩岩神通廣大發法金剛、如來の佛勅を蒙つて、豫め汝を此處に待つと呼はる、南に向ふと南には我眉山清涼洞法力無量勝至金剛、東に轉すると東には須彌山摩耳崖毘盧沙門大力金剛、西に奔ると西には崑崙山金霞嶺不壞尊王永住金剛、後からは悟空が、牛魔王待て牛魔王待てと追つて來る、せん方なく雲を放つて天上に飛び昇ると、天上よりは托塔李天王哪吒太子「玉帝の勅旨を奉じて今日汝を降す」と待ち受けて居る、是に於て牛魔王必死を極め、以前の大白牛となつて天王に頼いてかゝつた、哪吒太子が、急がはしく追つて來た悟空に會釋して、變じて三頭六臂となり、牛魔の脊中に飛び乗つた、斬妖劍を振つて牛頭を斬り落す、斬り落とすと共に切り口より更に牛頭を出す、又斬ると又更に牛頭を生ずる、續け様に十三頭を斬つたが、斬るに従つて牛頭を出して決して盡さぬ、太子が大いに怒つて、火輪兒を出して牛魔に打ちかけ、烘々たる火焰を吹き起した、牛魔王苦鳴亂跳して變化して身を脱しやうとするが、李天王の照妖鏡に照されて、變化が出来ぬ、遂に力谷まつて、「命をゆるせ、命をゆるせ、佛法に歸伏せう」と叫び出した、
「命が惜しくば芭蕉扇を差し出せ」と云ふ

「芭蕉扇は先刻、羅刹女に預けて置いた」そこで太子が火輪兒を收めて、縛妖索を以て鼻の孔を通し、悟空等と共に芭蕉洞に来る。

羅刹女も既に及び難きを受つて、芭蕉扇を渡した、皆々連立つて火焰山の麓に来た悟空が芭蕉扇を揮つて三度び煽ぐと、風生じ雨降り火消えて涼氣忽ち生ずる、羅刹女が

「大聖、火焰が収まりましたなら、何卒扇をお返し下され、以後は悪業を廢して佛道を修めまするから」と云ふ、悟空が

「三度煽ぐと一年五穀を收むる間だけ火の消えるさうな、何日までも火の燃え出ぬ法はあるまいか」と云ふ、

「それは續けて四十九扇煽げば永劫に火は滅しまする。」

そこで四十九扇を煽ぎ了つて扇を羅刹女に返すと、羅刹女は喜び謝して山に歸り、神將等は白牛を率ひて天上に歸り、山下の農人等は耕作の心安くなつたを悦び、土地神は罪期満ちて天上に歸るを喜び、四人は容易く山を越えて西に向つて行く。



三十九 小雷音寺

春になつて、一の山を越した、山の麓に大なる寺が見える、三藏法師が参詣して行かうと云ふ、悟空がしばし眺めて、

「如何も彼の寺には怪しい點がある、お廢めになつた方が宜しい」と云ふ、

「いや、そもく國を出る時から、寺があつたら寺に参らう、塔があつたら塔を掃はうと云ふ聲を立て、置いた、是非行く」と頑固に云ひ張つて、白馬を急がせて山門に来て見て、

大に驚き

「悟空、此の愚者奴、我等は最早如来の御膝下に来て居るではないか、見よ、雷音寺と書いてある」と叱りつける、叱られて悟空が山門の額を見て、

「師父、是は如来の御寺では有りませぬ、雷音寺の上に小の字があるをお見落しなされたか」「三藏が熱く見ると成程小雷音寺とある、

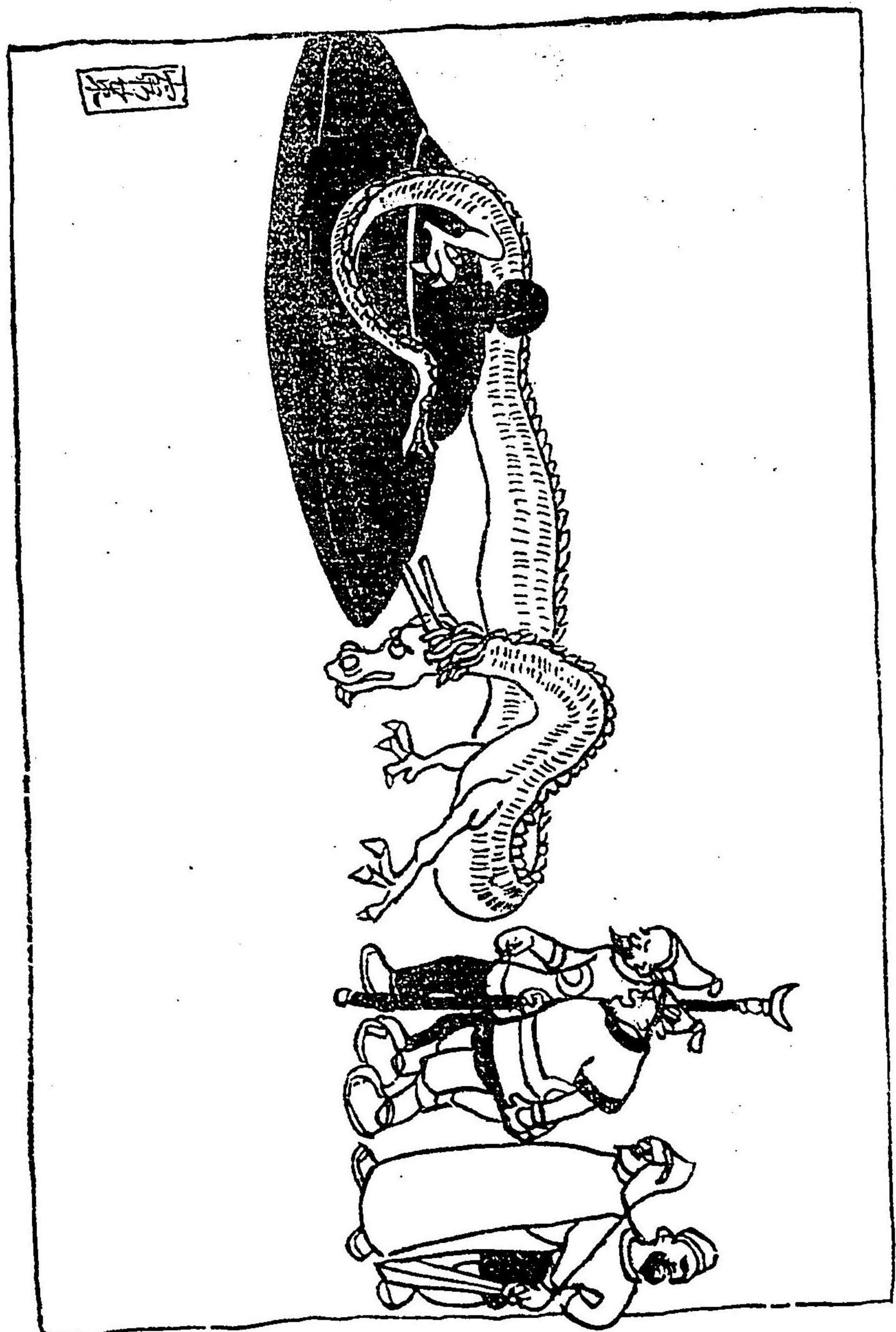
「いや小雷音寺でも、兎も角雷音寺と云ふからは、何方かの菩薩様がお出あるに相違ない、と云ひ合つて居ると、山門の中から

「唐僧三藏、御寺の前に来て何故の緩怠ぢや、疾く来て如來を拜め」と呼ばつた。
 三藏が恐縮して、急ぎ僧帽袈裟を整へ、惶る惶る山門を入ると、正面の大殿間には、如來を中央に、五百羅漢三千比丘等が列座して居る、悟淨八戒も恐れ入つて膝行頓首して進み行く、獨り悟空は昂然として鐵棒をつき鳴らし、大踏歩して行く。

「悟空、如來の御前で無禮であらうぞ」と羅漢が叫んだ、悟空が

「何を云ふ妖怪奴、佛の眞似をするとは怪しからぬ」と、棒をあげて打ち入らうとした、其時頭の上から、忽然として大金鏡が落ちかゝり、悟空を中に包むと見ると、ハタと閉ぢ合ふてしまつた、同時に羅漢や比丘尼が立ちかゝつて、手取り足取り、三藏を始め八戒沙淨を打伏せ引縛つてしまつた、金鏡の中に入られたものは二日の間に化して血水となる、妖怪の王が、悟空を血水となして後三藏等を煮て喰はうと、縛つたまゝに奥の方へ禁錮した、其内夜になつた。

悟空は金鏡の中に閉ぢ籠められ、大に驚き棒を振つて、右に突き左を叩くが效がない、急に法を使つて、身を大きくすると、金鏡も亦大きくなる、身を小さくすると、金鏡も亦小さくなる、身の毛を抜いて鐵となし、其處此處と揉んで見たが、是も效を奏せぬ、途方に



暮れて、呪文を唱へて、三蔵守護の五方揭諦、六丁神を呼び集めた。揭諦や六丁は元より小神であるから、外から何をして金鏡の破れやうは無い、そこで六丁が金鏡を守り、五方が雲に乗つて大急ぎで天宮へ駆け昇つて玉帝に注進する。玉帝が二十八宿の星將に命じて、悟空の援軍として下界に降らしめた。

二十八宿の星將が、金鏡を圍んでいろ／＼相談をして居る。悟空が中から

「星官達何卒早く此の金鏡を打ち壊して呉れぬか」と云ふ。星將が

「待ちなさい、打ち壊すと大きな物音がする。物音が彼の妖王の睡りを覺ましては面倒だそれより皆で、此の合せ目をこち開けるから、少しでも間の隙いた處が出来たら身を變じて脱げ出なさい」悟空は中に居て、今か今かと、絶えず四邊を見廻して居るが、少しの間も出来なかつた。

二十八宿の中に、元金龍と云ふ星將がある。其身は大龍で頭に鐵の如き角がある。此の元金龍が千斤の神力を振つて、角を以て金鏡を突いた。果して金鏡は貫いたが、金鏡は恰も肉の如く角の周圍に緊々と順着して、又寸分の隙をも見せぬ。悟空が是を見て一計を案出し、

「元金龍星官、暫く痛みを耐えて下され」と云ひながら、鐵棒を變じて鐵針となし、角の尖端に微少な穴を穿ち、其穴の中へ身を罌粟粒と變じて入り、相圖をすると、元金龍がまた千斤の神力を以て、角を引いた、悟空は鏡外に出ると共に本身に復して、衆星官に禮を述べ、一聲叫んで鐵棒を金鏡に喰はす、銅山の崩るゝが如き響きして、金鏡は碎け散つた。

響きに驚き覺めた妖王が、狼牙棒を掲げ、手下を連れて現はれた。

「孫悟空、逃るな」と呼ばる。

「汝は何者ぞ、敢て佛菩薩の眞似をする」

「己は黃老佛と云ふ者だ、金鏡の代りに汝の五體を碎いて遣るぞ」悟空が大に怒つて鐵棒をさしかさして渡り合ふ、二十八宿の星將、幾百の小魔、入り亂れて戦ふうちに、黃老妖王が、腰から白布の袋を出した、ハツと一聲投げ上げると、驚く可し悟空も星將も、瞬間に袋の中に盛り入れられてしまふ、妖王勝を得て奥殿に歸り、三十條の繩を出して、一に縛り上げ、己は酒を飲んで寢室に臥した、手下も皆々寢靜まつた頃を見計つて、悟空が身體を小さくすると、縛り繩が自ら解け落ちる、三藏の禁錮されてある處へ忍び寄つて、

「師父、師父」と云ふ、三藏が

「悟空か、早く救つて呉れ、以後は決して汝の注意にそむかぬ。」

四十 黃老佛

そこで三藏を始め八戒等と二十八宿との縛を解いて、先きへ逃がじ、自分は蝙蝠となつて、荷物を探し廻ると、一室の卓子の上に置いてあつた、急いで脊負つて飛び出さうとして、鐵棒を取り落し、カタンと音を立てた、妖王が忽ち目を覺まして、衆人の逃げたるを知り、狼牙棒を把つて追ふて來た、山の下で二十八宿八戒等が返し合せ、互に命限りと戦つた暫く戦つて妖王がまた例の袋を取り出す、悟空が

「皆氣を注げる、袋が出た」と叫ぶまもなく、二十八宿八戒沙僧三藏まで、忽然と盛り入れられた、悟空は逸早く雲を放つて飛び上つたが、何とも手の下しやうが無い、

南瞻部州武當山と云ふに、真武蕩魔天尊と云ふ祖師がある、悟空は此人を思ひ出して、筋斗雲に乗じて飛んで行き、斯くくの大妖魔に師父等を縛にされた、何卒助けて下されと

頼んだ、天尊が自身来る譯にも行かぬので、配下の龜將蛇將五大龍神を差し遣はされた、小雷音寺に取つて返して、師父を出せと叫喚く、

「猿奴、此度こそは免さぬ」と妖王が立現はれる、待ち構へて居た龜蛇二將、五大龍神が切尖を並べて打つてかゝる、悟空も棒を廻して戦に加はつた。

結果は遂に同じ事だ、名に負ふ薄魔天尊の配下も、布袋の一包みにされて、悟空ばかりが僅かに残る。

其時西南の方より香風吹き來ると共に祥雲に乗じて、彌勒菩薩が降りて來た、悟空が慌ただしく禮拜すると

「悟空、我が此處に降つたのは、専ら小雷音寺の妖怪を收めんが爲だ」と云ふ、悟空が「彼の妖怪の布袋は如何なる寶貝でらう、全く拙者の手に合ひませぬ」

「彼は我等の聲を司る黃眉童子と云ふ者である、三月三日の元始會に、天上に赴いた不在の間に、我が寶貝を盗んで地上に逃げた、狼牙棒は聲を打つ槌、袋も我が後天袋子である。」

そこで彌勒が悟空の掌に禁の字を書いて、まかくと計を示す、悟空が小雷音寺の山門に



黄毛佛降伏

進み寄つて

「黄老佛、出で、勝負を決さぬか」と罵つた、妖王が

「五月蠅き小猿奴、断じて脱さぬぞ」と狼牙棒を揮つて出て来る、戦ふ事三十餘合、やがて例の袋を取り出さうとする時に、掌を開いて禁の字を見せながら逃げ出すと、袋をも忘れて、妖王は我知らず追ふて行く、追つて行く向ふに瓜畑があつた、悟空は何時の間にか影も見えず、只一人の翁が畑の中に立つて居た、妖王は長く驅けたので咽喉渇き、翁を呼んで、

「老人、此の瓜は汝が作ったものか」と云つた。

「然様でムります」と翁が云ふ。

「我に一つ喰はして呉れぬか」と妖王が云ふ。

「サア澤山召し上らつしやい。」

畑に瓜は多いが、皆青いのばかり、熟した瓜は僅かに一箇しか見當らなかつた、其一箇を取つて、忽ちの間に喫ひ了つた、喫ひ了ると共に腹中に物あつて跳るが加く、痛みに耐えかねて地上に轉倒した、瓜の中に悟空が居たのである、是を見て瓜作りの翁が笑ひ出して

彌勒菩薩になつた。妖王倍々驚いて、頓げ廻りながら手を合せ、

「主公、菩薩様何卒お助け下され」と泣き叫ぶ。彌勒が先づ妖王から狼牙棒と布袋を奪つて、

「悟空、最早宜しいから出て来い」と云ふ。悟空は屢々敗を取つて居るから中々出て来ぬ、尙烈しく五臟六腑を掻き廻す。妖王は青くなり赤くなり、赦せ赦せと叫ぶ。菩薩が漸く有めて口を開かせて悟空を出した。

此度は反對に、妖王が袋の中に入れられて、引立てられて小雷音寺に来る。悟空は三度二十八宿等の縛を解く。菩薩が

「黄眉童子、彼の金鏡は如何したか」

「金鏡は悟空が打碎きました。破片は取つて置きました」と袋の中で云ふ。金鏡も亦菩薩の寶貝である。破片を集めて呪文を唱へ、また元の形にして、別れを告げて歸り去る。二十八宿も龜蛇二將等もそれづくに歸り去る。三蔵等も西に向つて、白馬の足掻きを早めて行く。

四十一 七 絶 山

或る夕方一の村に宿を求めた。主人の老人が

「和尚様方は折角此處まで来られたが、到底も西へは行けませんまい。此村の西の方に七絶山と云ふ山があります。山の廣さは八百里、全山盡く柿の樹で、幾百年となく熟しては落ち、熟しては落ちた實が、重なり重なり腐れ合ひ、其の臭ひ甚だしく、到底人の耐ゆる事でもりませぬ」と云つた。悟空が

「馬鹿々々しい話だ、其那山があるものか」と云ふと、老人が悟空の身小さく顔醜きを侮つて、

「小坊主何を云ふ」と怒る。三蔵が有めて、

「此の弟子は見かけは斯醜いが、今迄幾萬の路、幾十の妖魔惡獸を凌いで来たのも、皆此の弟子の法力でゐる」と云つた。是を聞いて、老人が村の老人達を呼んで来て、頓かに接待を厚くし山の如く御馳走をする。悟空が「老人何故に斯く御接待なさる」と聞くと、

「然れば今のお話を聞いたるに依り、一つお頼み申して、此村の難儀となる、妖怪を退治して戴きたいと、皆々とも相談しました故」と云つた。

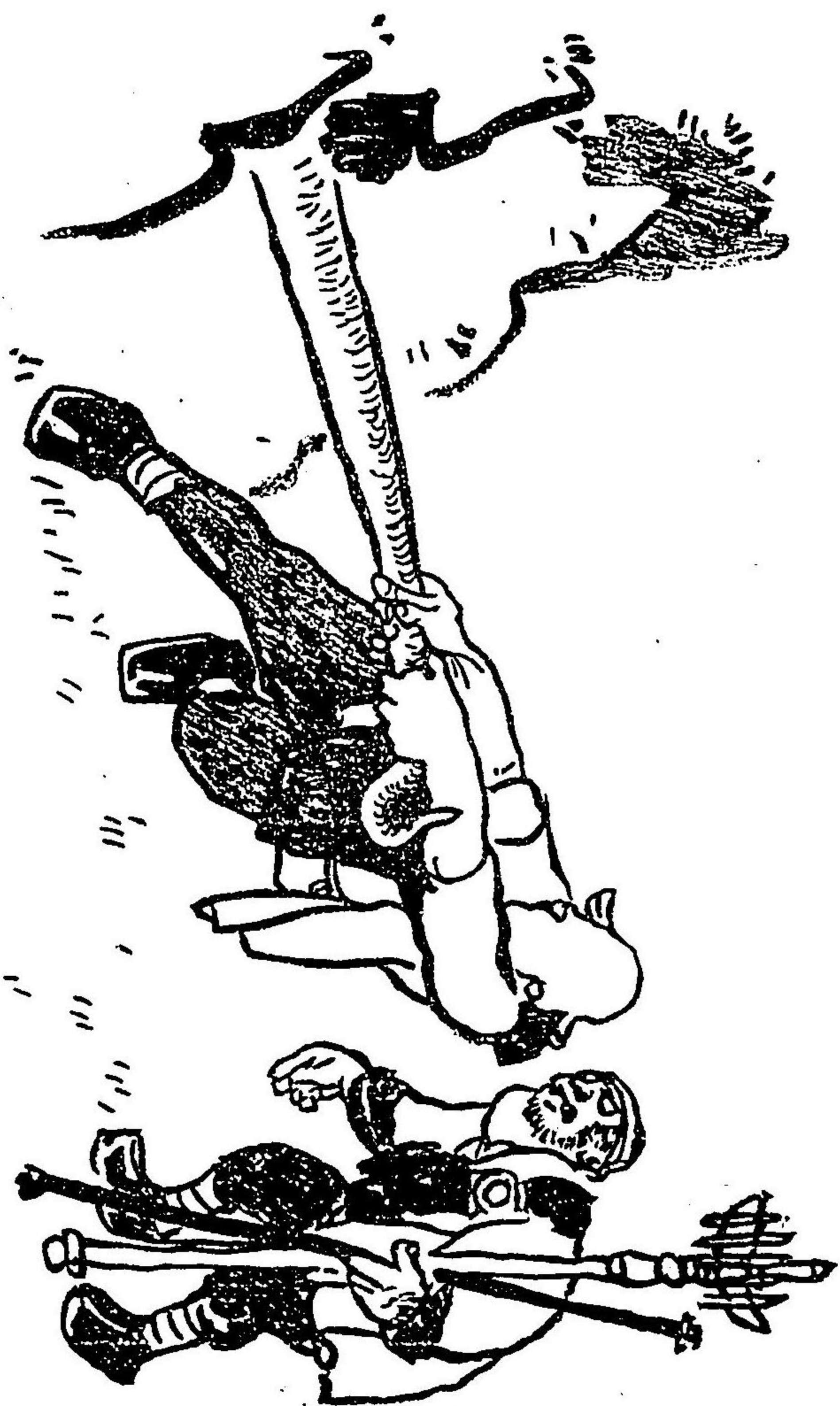
「出家は人を救ふが職業、随分退治して上げやうが其の妖怪は」と問ふと

「三年前に大風が吹いて、風と共に村の男女牛馬の類が見えなくなつた、其後は引續き、風の吹く毎に人畜を攫つて行きます、併し退治して下さる前に、何卒證文を書いて下され」と云ふ。

「妖怪を退治するに證文とは妙な事だ」と云ふと、

「實は昨年、法力のあると云ふ和尚を頼んで来て、法術を行つて貰つた處が、和尚は甲斐なくも頭を西瓜の如く打割られ、其上に命の借金やら弟子共への心付やらで、村では大分の入費を徒にしました、其次に頼んだ道人は、始めから澤山の禮金を取つて置いて、法術を行ふと云つて出た切り歸らず、後で其の死骸を谷の中で見出しました、和尚様方を頼んで、若しも反對に命を殞された時に、あとの葛藤が無いやうに致したい、其代り御禮も和尚様方の仰せ通りに致します。」

悟空が苦笑して、



悟

「いや決して其の御心配には及ばぬ、死んだとて必ず申し條は無く、退治したとて御禮は一夜の宿と三度の飯で澤山だ」と云ふ、老人達が大きに喜んで、尙酒肴を出して接待して居る處に、頓かに大風が吹いて来た、ソレ例の妖怪が来た、村中大騒ぎで、戸をさし固め家の奥に逃げ籠る、八戒等も師父と共に逃げ籠らうとすると、行者更さ留めて、
 「臆病者奴、汝は此處に居て拙者の助けとならねばならぬではないか」と云ふ、其時風上より暗夜の空に、二つの光り物が現はれた、

「彼は何だらう」と八戒が云ふ、沙僧が

「彼れは妖怪の目だ」と云ふと、八戒が

「彼れが目ならば、口の大きさは何の位あるか、我々は一番みにされるであらうかなはぬ、かなはぬと、嘴で土を穿つて、顔を埋めて慄へて居た、

悟空は空中に跳り上つて

「来るは何者か、名乗れ、名乗れ」と叫ぶが、一言の答もなく、只黒雲の中を得體の知れぬ姿をほの見せて、槍を揮つて突いてかゝる、悟空が劫を煮やして棒を廻して相闘ふ、下では八戒が、漸く顔を上げて見ると、妖怪は如何やう受け太刀の氣味となつて居た、先方

が弱いと見て大きに威勢を現はし、共に雲に乗つて釘把を振り廻すと、妖怪が又一條の槍を出し、二條の槍を以て二人の對手となりやゝ暫く戦つた、

「此奴中々の槍使ひでは無いか」と八戒が云ふ、悟空が、

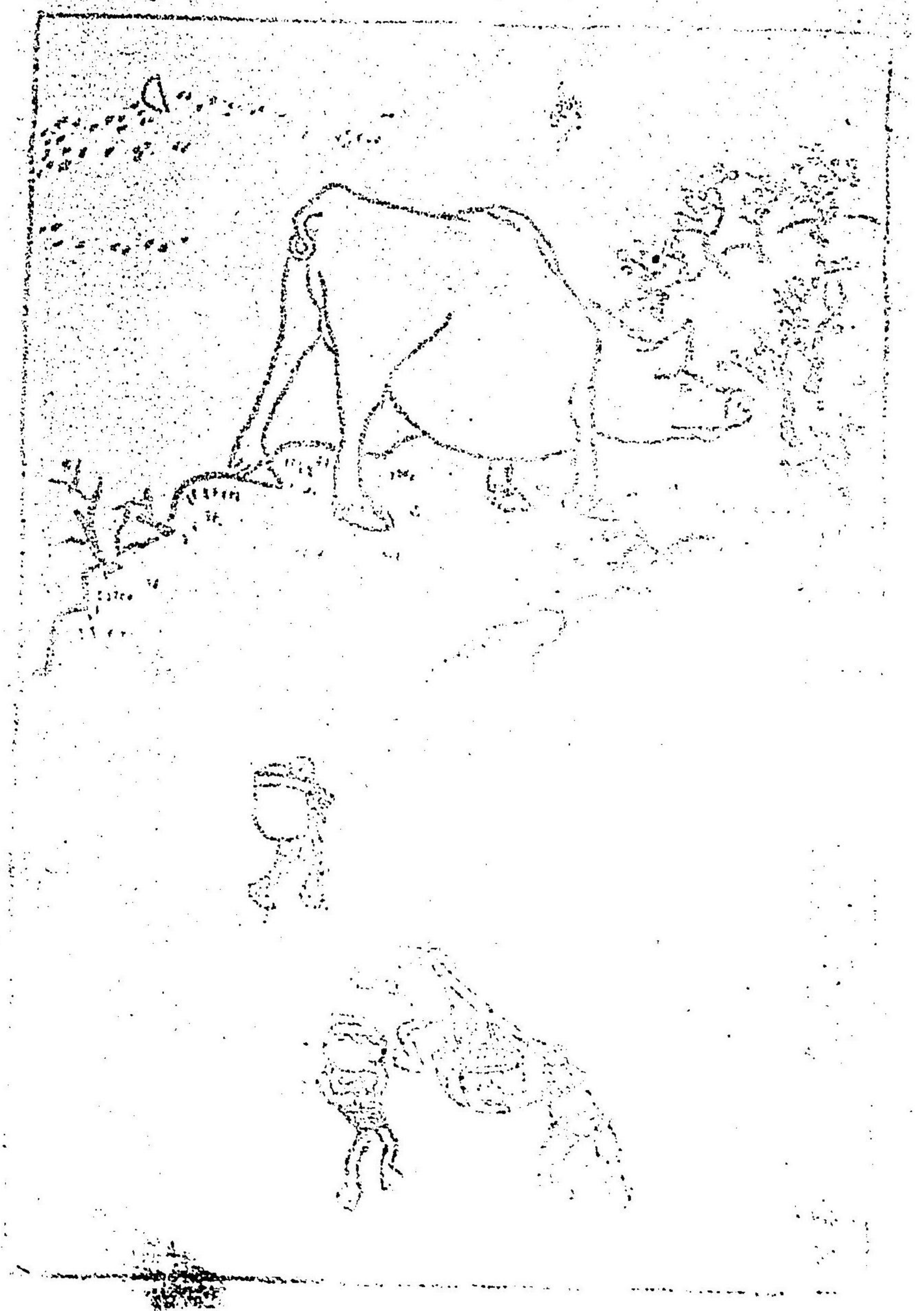
「此奴は始めから物を云はぬ、想ふに未だ法力全からずして、畜生の體を脱せぬ類であらう、今に夜が明け、陽氣が増すに従つて弱るに相違ない。」

果して雞鳴き東雲となると、妖怪急に槍を引いて、黒雲と共に逃げて行く、臭氣忍ぶ可らざる、七絶山の麓の小山まで追ひつめると、妖怪が本相を現はして、見るも恐ろしき大鱗となつた、鱗の色は血を染めたるやうに赤い、小山の横穴に逃げ入つて、尻尾が少し残り居る處を、八戒が掴んだ、引出さうと力を極めるが出ぬ、

「八戒、引かぬでも宜しいから、小山の向ふに廻れ、向ふに出る穴があるだらうから」と悟空が八戒を向ふへ遣つて置いて、鐵棒で尻尾を打つ、尻尾を打たれて果して向ふの穴へ出た、向ふの穴口には八戒が呆然と立つて居た、其の脚を尻尾で碎げよと拂はれて、云ひ甲斐なく草の中に倒れ臥す、悟空が追つて来て、大鱗に打ちかゝると、大鱗が取つて返して、大口を開いてフツと呑み込んでしまつた、是を見て八戒が



梅の山



「師兄が吞まれた。如何せう」と草の中で叫喚く

悟空が蟒の腹の中から、

「八戒騒ぐな、今此奴を舟の形にして見せう」と脊骨に鐵棒を當て、ウンと押す、蟒が苦しがつて、反り返り恰も舟の形となる、八戒がケロリとして、

「師兄、橋が無いではないか」と云ふと、脊を突き抜いて鐵棒が六七丈も出た、大蟒は苦痛に耐えず、伸立打ちながら小山の此方まで来て死んでしまった。

村の者は活佛の如く三藏寺を敬ふ、いよく七絶山を越す事になった、悟空が

「八戒、汝一つ大冢になつて路を開かぬか」

「それは容易いが、身軀が巨きくになると、従つて食物が多く要る」と八戒が云ふ、其の食物なら、妖怪退治の御禮に、何程でも村中で上げませうと老人達が申し出た、そこで八戒が身を變じて大冢となつた、長さ百餘丈、七絶山の柿の實も柿の樹も、一息に二三丁位づつ、鼻で掻き退けられる、村からは大軍の兵糧でも運ぶやうに、夜は篝火を焚き連れて、食物を次から次へと持つて来る、大冢は好い事にして且つ食ひ且つ働き、丁度三晝夜にしてさしもの七絶山に全く道が開けた。

四十二 病 國 王

朱紫國と云ふ國がある、其の國王が三年前より病に罹り、國內の醫師一人も是を治し得る者が無い、そこで城中に榜を立て、國の半分を懸賞にして良醫を募つて居る。

夏の比、三藏等一行が此國に來た、先づ會同館と云ふ他國の者を宿す役所に行つて馬を繋ぎ荷を卸す、小役人が食料の米や野菜を持つて來た、其の調理を弟子共に命じて於て、三藏は關文に印を貰ふ爲めに王宮に行く、悟空等が食料を調理せうとすると鹽醬油の類が無かつた、八戒に行つて買つて來いと云ふと、八戒愈けて、嫌だと云ふ、

「先刻通つた街に甘い物を澤山賣つて居る家があつた、何か夫手に買つて來る、己も行くが汝は行かぬか」と唆かすと、早くも涎を含んで、

「行くとも行くとも」と云ふ。

甘い物屋が無かつたので、八戒が涎り出して、途中から歩かなくなる、悟空が獨り買物に廻つて行くと、彼の良醫を募る榜が目に残まつた、例の惡戯氣を出して、俄かに旋風を吹かせると、榜守りの役人共が、驚いて袖の中に顔を入れて打伏して居る、其の際に榜文を



盗んで、八戒を探すと、街の壁に寄りかゝつて立眠りをして居た、其の懐へ榜文を押し込んで、知らぬ顔で會同館へ歸つて來た。

榜守りの役人共が、風收まり首をあげると、大事な榜が失せて居る、膽を潰して町中を探して歩くと、妙な坊主が坐眠りをして居る懐から、榜文の端が出て居る、早速捕へて呼び覺まし。

「汝は何の爲めに榜文を取り去つた必ず國王の病を醫す手段があるだらう、いざ王宮へ同行しやう」と云ふ、八戒寢ぼけ眼に懐の榜文を見て大きに驚き、是れ必ず悟空の仕業であらうと悟つたので

「榜文を取つたのは、己では無い、兄弟子の孫悟空と云ふ者だ、孫悟空が取るからには必ず醫道の心得があるのであらう、會同館まで來て呉れ」と云つて、役人共を連れて歸つて來た。

悟空は沙僧に先刻の悪戯を話して笑つて居る處へ、八戒を先に、榜守の役人共が入り來つて、

「孫老爺、榜を取られたからには御心得があつての事でムらう、何卒王宮に行つて下され」

と云ふ、悟空が

「如何にも心得がある、若し國王自身に迎ひに来られたなら、診て上げてても宜しい」と高く出た、役人共が王宮へ行つて唐僧の弟子に斯く／＼申す醫師がありましたと申すと、國王は病重くして迎ひには来られぬとあつて、大臣が名代に来た、

三藏は王宮に在つて此事を聞いて、遂ぞ悟空に醫師の心得があるとは聞かしたので、酷く心配して居る、悟空は泰然として王宮に進み入り病國王に謁見すると、氣の弱い國王は、悟空の異相に驚いて、奥殿に逃げ入つて出て来ぬ、悟空が、

「拙者の姿を見る事を好まれぬなら、敢て玉體に近かぬでも宜しい、室を隔て、糸脈を見ませう」と云つて、身の毛を三本抜いて、三條の金線を作つた、長さ各々三丈四尺、一方の端を國王の脈處に着けて、一方の端を手を持ち、暫らく考へて居て、是は云々の脈が洗み、云々の脈が弱つて居る、必ず何か大に驚き大に悲んだ事あつて、それが病の元となつたでムらうと云ふ。

國王の病は實に大に驚き大に悲しんだのが元になつて居る、室を隔てながら聲高に「果して御身の云ふ如くである、願くは宜しきやうに薬を調じて呉れ」と云はれた、心配

國を診西兵の術



して居た三藏も、おかげで大分評判がよく、其夜は王宮に泊められた、悟空は得意になつて會同館へ歸つて来る、後から侍醫共より、藥種と調藥器とを送り越した、早速二人を助手にして藥を作る、巴豆の粉末と大黃と、鍋の尻の墨とを交せて、其上に白馬の小便を加へて丸藥を三つ丸めた、小便で丸藥を煉るとは聞いた事が無いと二人が驚く、悟空が眞面目な顔をして、

「何を云ふ、彼の馬は凡馬では無い、龍の化身だ、彼の小便は何にでも利く。」

翌朝侍醫が藥を取りに来た、丸藥を渡して、

「是は只の水で服しては不可、須らく無根水を用ゆ可きだ」と悟空が教へる、

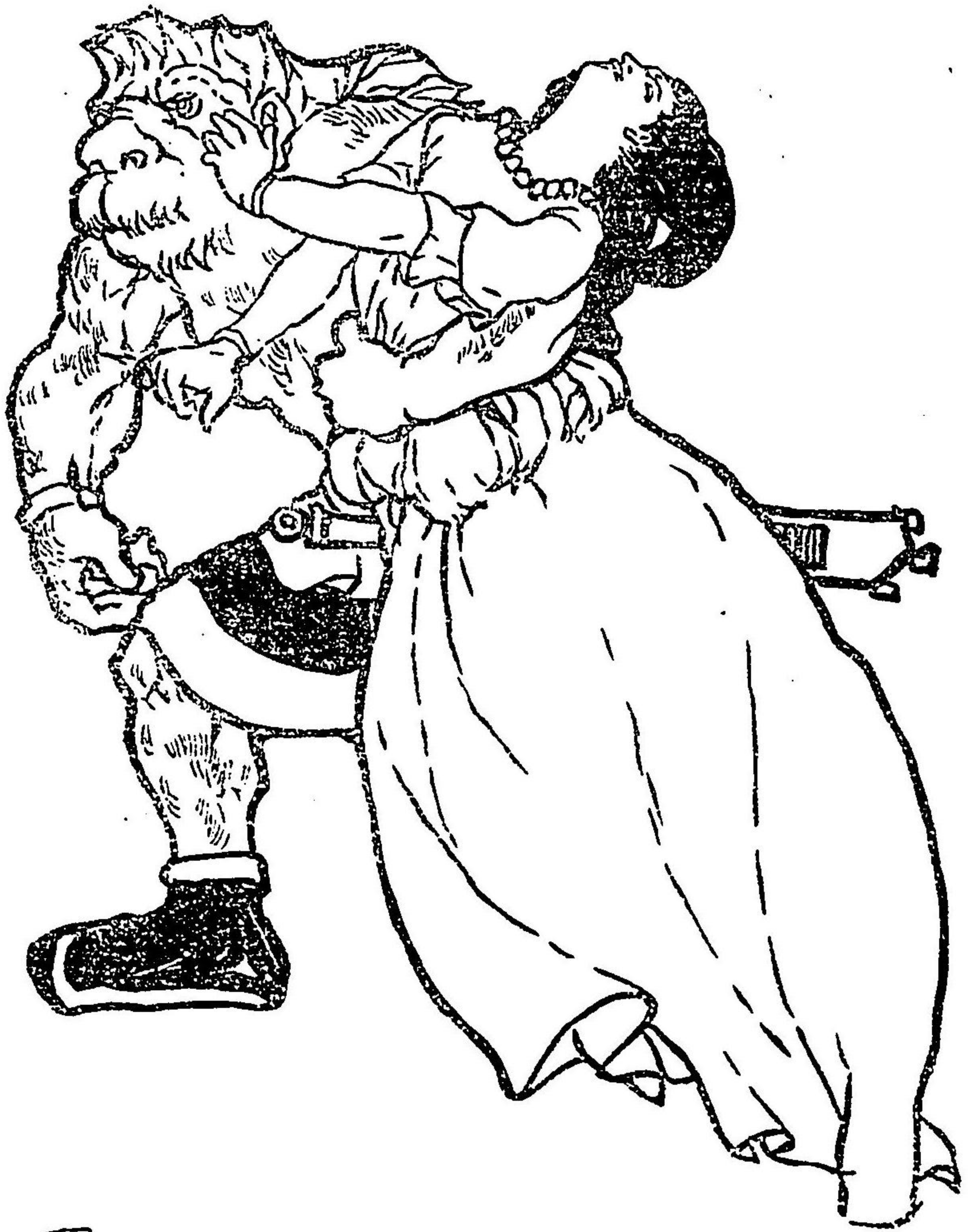
「無根水とは如何した水でゐるか」と聞くと、

「根の無い水だ、即ち地上の水でなく、天から降つて来る水だ」と云ふ

「生憎今日は雨が降らぬが」と侍醫が困つた顔をする、

「今に降るから、降つたら差し上げなさい」と悟空が云ふ、侍醫が歸つた後で、悟空が呪文を唱へて東海龍王を呼び出して、

「雨を少し降らせて呉れ」と云ふ、龍王が



金聖皇后

「急な事で雨を降らす器を持参せなかつた」と云ふ。
 「いやほんの僅かであつたが、何とか工夫はあるまいか」と頼むと。
 「それなら拙者が唾を吐いて小雨を降らしませうと、云つて、示された王城の上へ行つて唾を吐いた、何も知らぬ國王は、馬の小便と龍の唾とで薬を服む。

四十三 金聖皇后

馬の小便と龍の唾でも、悟空の處方は剛に當つて、一夜の下痢と共に國王の病が治つた、祝賀の宴を開いて、悟空に厚く禮を述べると、悟空が

「殿下、御病氣は御快くなされたが、そも／＼御病氣の根元の驚きと悲しみは、何事でもつたか」と問ふ、國王が愁然として、

「宮中の内事を外人には云ひ難いが、貴僧は我が命の親であるから話させう、實は三年前五月端午の節句に、妻なる金聖皇后と祝酒を飲んで居た時、突然一陣の風吹き来ると共に、空中より一人の妖魔現はれ、我は麒麟山獅豸洞の魔王、賽太歳である、皇后の艶色こそ所望だから連れて行く、渡さずば、國王を打殺し、國土を灰にしてしまふと威して、強奪

して行つた、其後十月に皇后の侍女が要ると云つて二人の宮女を連れて行き、去年三月にまた二人、七月に二人、今年二月にまた二人を連れて行つた、最愛の妻を奪はれた悲しみが、如何にしても忘れられず、疑つて此の病をなしたのである」と云ひもあへず涙をハラハラと落した、行者が、

「然らば事の次手に其の皇后様をも拙者が取り返して上げませう」と云ふ、國王が喜んで、

「若し貴僧が、我命を救つて下さつたのみならず、我皇后をも取り返して給はるならば、是れ重々の大恩、國を擧げて貴僧に献じませう、百千の臣下はありながら、一人として我爲めに魔を降すと云ふものは出ませんでした。」

其時、奥殿物騒がしく、一人の臣下が奔り来て、

「また妖怪が黒雲に乗つて宮女を取りに来ました」と告げる、悟空忽ち空中に跳り上り

「来るものは何者か」と云ふ、雲の中より

「我は麒麟山賽太歳王部下の先鋒である、王命によつて今日また宮女を迎ひに来た汝は何者か」と呼ぶ、

「我は唐土より西天に赴く孫悟空と云ふ者である、己が居るからには汝等の横暴を許さぬ、先づ此一棒を喫つて往生せい」と打つてかゝる、妖怪槍を揮つて戦ふ事僅かに一二合、忽ち槍を半分に折られて、雲を回して逃げて行く、悟空も強ては追はず、元の席に降つて来た、國王大に喜んでまた更に酒をすゝめる。

「麒麟山は大略、何里位隔たつてありまするか」と悟空が問ふと、

「其後查べた處では南の方に急行して五十餘日程あるさうでゐる」と國王が云ふ

「然らば今から」と直ぐ様打立ちさうにするので國王が推し留め

「愈々出向かれるならば、別に吉日を撰び、良馬や路用金やらの準備を申し付けますから」と云ふ、悟空が大笑ひして、

「それは山を匂ひ登り谷へ匂ひ下つて行く人の事である、拙者なら、此一盃の酒の冷めぬ間に行つてしまふ」と云ふかと思はれば、ハツと一聲影も形もなくなつた、國王が膽を潰して、いよ／＼厚く三藏等をもてなして居る。

悟空は刹那の間に麒麟山に来て、獬豸洞は何處と見巡ると、峯の彼方から、忽ち一道の火焰が上つた、又忽ち一道の煙が上る、又次に一道の沙が上る、悟空が腹の裡で大分驚いた。

彼が賽太歳の妖術であらう、彼の物凄煙や火焰を喰つてはたまらぬと思つた、其時峰をめぐつて一人の小妖が現れ来た、手に書簡箱を持つて居る、悟空が咄嗟に道童の形と變じて、山の下で行き會つて小腰を屈め、

「長官、何處へ行かれる」

「朱紫國へ宣戦の書を持つて行くんだ」と小妖が答へる、

「如何なる事件が出来て戦を始めるでゐるか」と問ふと

「最初我大王が朱紫國から皇后を奪つて來られた、處が其當時一個の神仙が來て、皇后に五色の仙衣を贈つた、五色の仙衣が忽ち一面の刺となつて、折角奪つて來た皇后と、大王は夫婦の談らひをする事が出来ぬ、それでも氣を長く大事にして置いて、時々朱紫國から侍女を呼び寄せて居た、今度また連れに行つたら孫悟空と云ふものを出して、使者に無禮を加へた、それ故の戦書だ、憐れや彼の國土は悉皆黒土となるであらう」と説き誇る、

「成程左様でゐるか」と云つて、鐵棒を取り出して一打ちに打ち殺した。

死骸を提げて、一たん朱紫國へ取つて返し、先づ當座の勝を報する、國王は皇后の清淨を保つて居るのを聞いて喜び且つ悲しむ、悟空が、出直して麒麟山に行くに就て、皇后が疑

を起さぬ用心に何か見知りの品物を持って行きたいと云ふ、國王が、端午の節句の祝にて、皇后が當時挿して居た、美しい絹で飾つたまゝの櫛を出す、美しい絹の色の襪も果てて居るのも思出の種と國王は涙脆い。

彼の打殺した小妖を調べて見ると、獬豸洞の合札を帯びて居る、合札に有來有去と云ふ名が書いてある即ち小妖の名である、そこで悟空が有來有去の姿に變じ、麒麟山に来ると、妖王賽太歳が軍勢を整へて、使者の歸を待つて居た。

「有來有去、彼方の様子は甚麽であつた」偽有來有去が深く恐れ顔で、

「いや朱紫國の勢は大層なもので、千軍萬馬雲の如く、拙者が參ると直ぐ様引挿へて、既に斬り捨てられうとした時に、先方の軍師が出て、合戦の折には使者を殺さぬが法だと制し、三十棒打たれた上だから命を助かりました」賽太歳が冷笑つて、

「如何ばかり多勢の軍馬を催しても、我が金鈴の煙火黃沙に會へばそれ切れた、併し金聖皇后が、此度の軍騒ぎを酷く心配して居るから、汝奥へ行つて朱紫國の軍馬は強さうであつたと氣安めに話して上げる。」

四十四 煙火黃沙

洞の奥の殿の中には、物思ひにやつれて更に美しき金聖皇后が、妖物の侍女にかしづかれて打沈んで居る、今迄朱紫國から、皇后の侍女として奪つて來られた宮女共は、皇后の身代りにせられて、妖魔の爲めに次から次へと斃されてしまつたのである、此處へ偽有來有去が來た、

「皇后様、拙者は今日大王の使者となつて、朱紫國へ參つた者で、其節彼方の國王から傳言された事が、有來有去が忽ち悟空となつて、侍女が次の間へ避けると、有來有去が忽ち悟空となつて、

「實は拙者は西天に經を取りに行く唐僧の弟子の、孫悟空で、此度朱紫國王に頼まれて、貴后をお救ひに參つた」と云ひ乍ら彼の櫛を出して見せた、皇后櫛を受取つて涙雨の如く、

「若し貴僧の御力で、妾が國へ歸る事が出来ましたら、死ぬるまで御恩を忘れませぬ」と云つた、悟空が

「彼の妖魔の持つて居る寶貝は如何なるものでゐるか」

「妖魔は三つの金鈴を持つて居ります、一箇は火を出し、一箇は煙を出します、火と煙とは未だ然程恐ろしいものではありません、第三の黄沙こそ、人の口鼻の裡に入れば、直ちに其の命を奪ふさうです」と皇后が云つた。

そこで悟空が斯くくと計策を教へて、元の有來有去となり、賽太歳の處に来て、

「皇后様が御招き申して来いと仰せられた」と云ふ、妖魔は常は皇后の傍へでも寄り、且つ泣き且つ罵られて居つたものであるから、非常に悦んで、軍務を捨て、奥へ来た、皇后が愛嬌を作つて、

「實は妾が今迄大王に辛く當つたのは、昔朱紫國に居た時は、國の寶とも云ふ可きものは、何物にもあれ妾が保管の役であつたのに、大王には珍らしい金鈴があると聞くばかり、見せても下さらなかつた爲であります」と云つた、賽太歳が高笑ひをして、

「然様な事は容易いものだ、然らば今日から汝に預りませう」と云つて、腰から豹の皮の囊に入れた金鈴を出して卓の上に置いた、

「預ける事は預けるが、此の鈴の中につめた綿を抜いては、大變が起る」と注意する。

悟空が知らぬ顔をして居ながら、隙を窺つて金鈴を盗み取り、ソツと滑り出でた、性急は悟空の癖である、洞外までは辛抱がしきれず、洞中の人無き處へ来て、先づ手早く三箇の金鈴の綿を抜いた、抜くと共に轟然として煙火黄沙一齊に進り出で、上下左右に遍滿し、手のつけやうが無い、幾多の魔兵が驚いて妖王に知らせる、妖王が駆けつけて見ると、有來有去が金鈴を持つて迂路々々して居る、此奴盗人奴と立ちかゝると、有來有去が悟空になつて、金鈴を投げ捨て、鐵棒を振り廻して、逃げ出さうとするが、洞門嚴重にして其上多勢の魔兵に取り捲かれ、せん方無く咄嗟に蠅となつて壁に留つて居た。

奥殿の皇后は、此の騒動を聞いて、獨り思案に暮れ、

「あゝ命運拙く、折角救ひに来られた神僧も、如何やら敗を取つたやうだ」と呟いて居る、其處へ一匹の蠅が飛んで来て髪の毛に留まつた、

「皇后様、御心配なさるな、拙者は先刻の悟空でゐる」と微かな聲が頭の上でする、皇后が驚いて、

「貴僧は何處に居られます」と小聲で云ふ、

「お髪の上の蠅が拙者でゐる、掌をお出しなさい、其上に降りてお話しませう、皇后が

白い細い手を出すと、悟空の蠅が其掌の上に留まつて、更に計策を教へる。
 賽太歳は悟空を追ひ失つて心安からず、魔兵共によく用心させて居間に歸つて來ると、
 皇后の侍女の春嬌が迎ひに來た、

「騒動も静まつた様ですから、大王様に御酒を上げたいと仰せられました」と云ふ、妖王
 深く悦んで奥殿に來ると、皇后が親ら大盃に酒を酌んで、

「先刻の盗人は如何になりました」

「いや孫悟空と云ふ奴が、途中で有來有去を殺して、其姿に變じて來たらしい、幸に金鈴
 は取り返したが、悟空は何處へか逃げて了つた」と妖王が云ふ、其の孫悟空は春嬌となつ
 て傍に立つて居る、實の侍女春嬌は、睡り蟲を付けられて、帳の影に前後も知らず眠つて
 居る。

僞春嬌がひそかに身の毛を咬み碎いて幾千の虱を作つた、幾千の虱が盡く妖王の衣類
 に取り付いた、妖王が急に體一面痒くなつて、バリ／＼掻きながら見ると、袖にも襟にも
 虱が行列して居る、皇后の手前甚だ赤面の態である、皇后が笑つて、衣類は長く洗はぬと
 妙な蟲が付きます、お脱ぎなされと云つて段々衣類を脱がして行くと、腰の金鈴の囊には、



殊に多く付いて居た、解き下して卓の上に置き、頻りに皇后と共に風退治を行つて居る隙に、偽春嬌が素早く身の毛を變化させた偽金鈴と取り替へてしまつた、妖王は風を取り盡くし、再び酒を飲んで大いに酔ふたが、皇后の體には例の刺があるので、辛抱して己が居間に寝に歸つた。

偽春嬌がやがて悟空となつて、洞門外に忍び出で、早晚近き洞門の前に突立つて、

「賽太歳悟空がまた来たぞ皇后を返せ」と叫んだ、魔兵共が驚いて目を覺ますと、洞門が開いて居る、慌てゝ閉して、酔臥の妖王を呼び起す、妖王が

「悟空奴、此度こそ免さぬ」と宣花斧を押取つて洞外に現はれた、戦ふ事七十餘合、妖王が力疲れて、腰より金鈴を取り出して打振つた、凄じき勢で迸り出る等の煙火も黄沙もサツパリ出て來ぬ、悟空が冷笑つて、

「己にも金鈴があるぞ、見ろく」と眞の金鈴を取つて打ち振り、一口の仙氣を吹いて大風を起した、火の紅、煙の黒き、黄沙と交つて大風に吹かれ、全く妖王を包んで了つた、妖王は己が寶貝に己と責められ、飛んでも跳ねても逃れ難く、既に一命危く見えた時、

「悟空待て、」と空中より留めるものがある、例の觀音菩薩である。

妖王は觀音菩薩の乗りも、の金瓶の逃げたので、三つの金鈴は首輪の寶鈴、朱紫國王は前
 年に罰せらる可き罪があつた爲めに、斯かる難儀を蒙つた次第であるさうな、菩薩は手
 の淨瓶の水を濺いで煙火を消し、妖王を再び金毛吼となして南海に歸り去る、悟空は魔
 兵を打ち散らして、皇后を救ひ出し、草を束ねて龍の形を作り、是に法術を加へて皇后を
 乗せて、忽ちの間に朱紫國へ歸つて來た、其處へ張陵天師と云ふ神仙が現はれて、前年皇
 后に着せた刺の衣を取り去つた、國王感涙を流して悦び謝し、國を譲らうと云ふが、三蔵
 等は袖を拂つて別れを告げた。

四十五 七 妖 女

秋去り冬盡き、三春の時候となつた、西天の路も半過ぎて、各々心に勇みつゝ行き行く、
 或る日丁度食事の頃に一軒の家を見出で、三蔵法師が親ら齊飯を乞ひに行つた、三蔵が
 獨り事を爲すと、必ず何等かの失敗を引き出す、家の中には四人の美女あつて刺繡し、庭
 の上には三人の美女あつて毬を蹴て居た、七人の美女が三蔵を見ると等しく走り集まつて、
 手を曳き腰を押し聲々に喜笑ひつゝ、奥の方へ連れて行つた、奥は石室陰々として、何様



西天行記



事ある可き状況である。三藏が驚いて逃げ出でやうとすると、忽ち取つて押へて縛り上げ、七人盡く衣を奪ひて臍を出した。臍の中からは純白な糸が限りなく繰り出されて、頃刻の間石室より庭より家より門までを只一塊の白き物にして丁つた。

三人の弟子は路傍で師父の歸りを待つて居ると、彼の家が忽然として雪の大塊の如くなつたので、大きに騒ぎ立ち、諸共に駆けつけては来たが何の故やら分らぬ、手を觸れて見ると、少し粘り氣があつて、極めて繊細な糸に似たるものである。悟空が呪文を唱へて土地神を呼び出して聞いて見ると、

「此處は盤絲嶺の盤絲洞と申します。七人の女妖が棲んで居りますが、拙者には何者やら本體は知れませぬ、何でも此の南三里に、濯垢泉と云ふ仙人の温泉があります。女妖共が仙人から奪ひ取つて、毎日三度づつは浴みに行く様子です。今は午時でゐるから、丁度彼等の浴み時になります。」

そこで悟空が八戒等を隠して置いて、蟬になつて待つて居る、やがて白糸の塊りが、蠶の桑を喰むやうな聲を出し始めて、見るうちに消えて行き、元の家となつて、家から七人の美女が現はれて、一浴みして來てから、彼の和尚を賞味しませうなど云ひ合つて出かけ

る、悟空の蠅が一人の肩に留つて、其の行くまゝに従つて行くと、果して美しい温泉に來た、珠玉を鏤ばめた門あり、彩色の牆あり、中には五丈に十丈ばかりの湯槽がある、深さは四尺ばかりと覺ほしく七人の美女が裸になつて入ると、白い美しい乳から上の肌が見える、七美女が春光の下温泉の中で、相戯れながら沐浴して居る處を、悟空が既に手を下さんとして、また自ら留めた、

「妖怪でも何でも、兎に角對手は女である、今我が神通を以て、此の温泉を熱湯にして、彼等を煮殺すのは容易な事だが、女の油断に乗じたと云はれては、我が名聲を下るばかりである、是は只假りに彼等の足留めだけをして置いて、師父を救つて行かう」斯く考へた悟空の蠅が、忽ち鷹と變じて女妖等の脱ぎ捨てた衣服を攫つて飛び出して、八戒等が處へ歸つて來た、

八戒が悟空の所置に承服せぬ、己が行つて退治してしまふと云ふ、悟空が、「汝が行くなら勝手に行きなさい、己達は兎に角師父を救ひ出すから」と云ふ、八戒が釘把を持つて出向いた、教えられた温泉に來て見ると、女妖等が口々に鷹の悪口を云つて困つて居る、八戒がニコ〜もので、



「やあ美人達、此の旅僧にも温泉を振舞つて下さらぬか」と、法衣を脱ぎ捨て、肥り猪首の髯坊主となつて、温泉に跳り込む。女妖等が駭き怒つて、入れじと抵抗ふと、八戒變じて鯨となり、十四本の白い脚の間を、擦り付き擦り脱げ泳ぎ廻つた。女妖等は湯玉を散らし彼方へ避け此方を押へて、罵り騒ぐ、よき程にして鯨が元の八戒となり、法衣を着し釘把を取つて、

「此の妖怪共、我が師父を捕へた罰に、一々撃ち殺すと、立ち向つた。女妖等は今は身の恥を顧るに遑なく、温泉より跳り上つて、各々臍より例の糸を吐きかけた。糸は煙の如く霧の如く、又細網の如くに覆ひかゝつて、地面踏む八戒をば、遂に地上に曳き倒し白い塊の底に押し籠めてしまつた。

美女の妖怪等は、八戒を押し籠めて置いて、髯のまゝで盤絲洞に歸つて来た。三藏法師は既に悟空等に救ひ出されて、縛つた繩が落ちて居るばかりである。そこで別の衣服を出して着て、神通を以て濯垢泉の糸をばまた身に返し、此上は兄長を訪ねて事を計らふと云ひつゝ出て行つてしまつた。

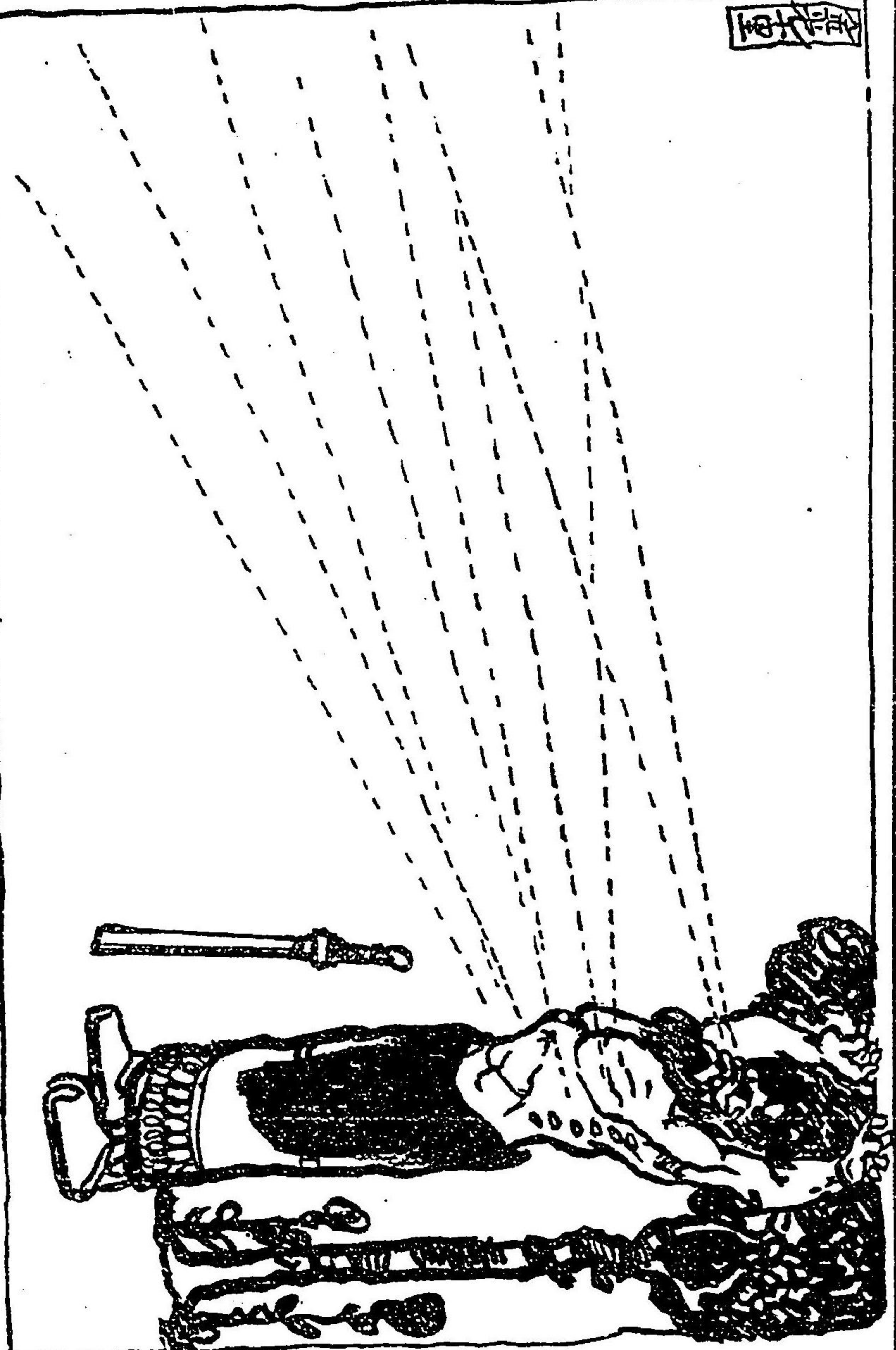
四十六 百眼魔君

良久して八戒を覆ふた糸が自ら消え去つた八戒が眼を擦りながら體裁惡氣に歸つて來た、再び馬を急がせて西に向つて行くと、幾何もなくして一の道院を見た、門には黃花觀と書いてある、此家に宿を借らうと進み入ると、一人の道士が出て來て、快く受け行き、廣間へ連れて行つて、種々長途の勞を問ひ慰める、道士は恰も一點の不良心なきが如くに見えた。

一人の道童が各々の前に茶を持って來た、一椀毎に二箇の赤棗が入つて居る、獨り道士の椀のは黒い棗である、悟空心の内に怪んで

「道士殿、貴下のは黒棗で拙者共のは赤棗ではふらぬか、拙者のと換へませう」と云ふ、「いや、貴僧方の御馳走に秘藏の棗を摘ませました、拙者までには數が不足なで、普通のを入れました」と道士が答へると、三藏が、

「悟空、折角の御芳志であるから、戴きなさい」と云つて、八戒沙僧等と共に飲んでしまつた。



飲み了ると怪む可し、三人各々面色變り口より泡を吐いて倒れ伏した、是を見た悟空が烈火の如くに怒つて、茶碗を道士に投げつけ、

「何の恨あつて、我等に毒を與へた」と、棒を揮つて打つてかゝる、

濯垢泉で我が妹等に恥を與へた返報を知らぬか」と寶劍を把つて斬り返して来る、隠れて居た七人の女妖が、一齊に悟空を取り圍んで、例の白い糸を吐き出した、是にからまれては敵はじと、忽ち雲に乗つて飛び出し、雲の上から眺めて居ると、黃花觀が復一塊の白となつてしまつた。

忽ち一計を案出して、身の毛七十を脱いで七十の小悟空を作り、鐵棒を七十に分ちて七十の鎌を作り、鎌を小悟空に持たせて、片端から彼の白糸を掻き破らせた、掻き破つて底の方に到ると、七箇の蜘蛛が現はれた、大さ各々二尺餘り、即ち七人の美女の本體である、一々に打殺して行くと、次に彼の道士が劍を揮つて現はれた、戦ふ事七十合、道士力疲れて退くや否や、衣を脱いで兩の手を揚げた、兩の手の下には二十の眼ありて、眼より二十道の金光を逃らした、悟空此の金光に包まれて眼眩き、前にも後にも右にも左にも出抜けられず、起んとしては倒れ起んとしては倒れ、さしもの大力量も用ゆる處なく、遂に一

匹の穿山甲と變じて、土の中に潜り入つた、手足を動かす事二十里ばかりにして、土を出て顧みると、彼の凄じき金光は尙十餘里を罩めて居る。雲の上では十萬里瞬くひまであるが、土の中の二十里は磁石の響を綿の如くに疲らした、土の上に安居して、大きに困り切つて居る處へ、仙女黎山老妯が現はれて、

「彼の妖怪は白眼魔君と云ふ者である、彼を降するは、紫雲山千花洞の毘藍婆菩薩でなくては埒があかぬ」と教へて呉れた、早速紫雲山に飛んで行く、毘藍婆菩薩も亦女仙であつて、悟空を知つて居られる、共に黃花觀に歸つて來ると、彼の金光は尙元の如く輝いて居る、菩薩が手の裡の針を金光に向つて投げ付けた、金光忽ち消散して、黃花觀の門前には七尺餘りの大蜈蚣が横はつて居る、菩薩は前に出た昇日星官の母で、共に本身は鶏たさうな、星官は甥を伏して菩薩は蜈蚣を伏したのは、鶏よく昆蟲を制するに依ると云ふ。毒害された三藏等も、菩薩の解毒劑に救はれ、厚く菩薩に謝し別れて、また西を望んで歩み行く。

四十七 一千一百一十一兒

冬の頃一つの城に着いた、城中に進み行くと、兩側の民家の軒に各々一箇の籠を吊して、五色の布を以て美々しく飾つてある、彼は何であらうと三藏が不思議に思つて、悟空に命ずると、悟空が蜜蜂となつて、軒毎に窺いて來て、

「師文、驚く可き事ではらぬか、彼の籠の中は盡く男の兒でムつた」と云ふ、三藏が益益怪んで、やがて城中の驛館に宿を乞ふて、事の次手に驛館の役人を捉へ、小兒の籠の由來を聞く、役人が小聲になつて、

「實は他國の人には申しにくい事である、此國は元比丘國と云つた、今は小子國と云はれて居る、國王が餘り賢い方で無い處へ、三年前一人の仙人が一人の美女を連れて來て、國王に献じた、國王は全く美人の色に溺れて、仙人を貴んで國丈と號させ、國內の事一切を委ねてある、そこで國王が何時となく體が弱つて來た、國丈が、蓬萊島へ行くて千年壽を延ばす神藥を求めて歸つた、處が其藥には藥味が要る、藥味と云ふのは、一千一百一十一の男兒の心臓である、そこで嚴命を城中に下して、彼の通り小兒を籠に入れて献する事に

したのである、明日が即ち、憐れな彼等の心臓を召さるゝ日である。
涙早い三藏が大きに悲しみ傷んで、悟空に

「何とかして救つて遣れぬか」と云ふ、悟空は

「其の國丈と云ふ代物が先づ怪しむ可きである、それは明日朝廷へ行つて見れば分るであらう、今夜は兎も角小兒の方を救つて置ませう」と云つて、六甲六丁五方揭諦等の小神等を空中に集めてしかじか命ずると、彼等旨を領して一陣の陰風と共に、籠の中の小兒を悉く取り去り、山中に連れて行つて、菓子食物を與へ、保護して置く。

翌日三藏が關文に印を貰ひに、王宮へ行く、其の僧帽の上に悟空の蠅が留つて居た、關文の事は滞りなく済んで、三藏は退出する。蠅が耳の邊に来て、

「師父、彼の王の傍に居た國丈は、果して妖怪の氣が見えます、拙者は後に殘つて尙よく見とゞけませう」と云つて、王宮の壁に留つて様子を窺つて居た。

處へ城中見廻りの役人が来て、

「陛下、昨夜何の故とも知らず、籠中の小兒が悉く見えなくなりました」と云ふと、國王が色を變じて、

「あゝ天我を亡ぼす」と嘆息した、國丈が

「いや天は却つて陛下に福を降します、彼の一千の小兒の心臓よりも效力のある薬味が自と手に入りました、只今退出した唐士の僧は、十世修業の法體で、彼の心臓を薬味にすれば、萬年不老の身となられます、直ぐ機兵士を遣はして、捕へて來られた方が宜しい。壁の蠅が忽ち翼を展べて驛館に歸つて來て、悟空となつて、三藏に此の事を物語ると、三藏が青くなつて騒ぐ、悟空が

「是は師父と拙者と身を代へねばなりませんまい」と云つて、泥を以て三藏の顔を塗り、息を吹きかけると、三藏變じて悟空となり、悟空は三藏となつて待つて居る、程もなく役人が兵士を率ゐて踏み込んで來て、

「唐僧國王の命によつて汝を捕へて行く」と云つて、偽三藏を連れて行く

恐王が偽三藏を見て

「唐僧、誠に氣の毒であるが汝に無心がある、願くば我が病を治する藥の爲めに、汝の心臓が貰ひたい」と云つた、

「お安き御所望でゐるが、心臓にも種々あります、陛下には何の心臓を献じませうか」



と偽三藏が答へた、國丈が

「黒心を貰ひたいものである」と云つた、

「兎に角、腹を割いて御覽に入れませう、鋭い刃物を下され」と偽三藏が平氣な顔で、小刀を受取つて、立ちながら胸を割き、腹を開き、五臟六腑を掻き廻して見せる、列座の臣下共は、目も當てられず袖に面を包んで居た、偽三藏が良久して、

「御覽の通り、是が紅心、是が黄心、是が青心、種々あるが、黒心と云ふものは見當りませぬ」と云ふ、愚王が呆然として居ると、偽三藏再び腹を接ぎ合して元の如くにし、

「陛下、是は陛下の御目違ひでござるぞ、御所望の黒心は却つて、彼の國丈殿こそ持つて居らるゝ」と大喝した。

國丈が事破れたと見て、忽ち雲を起して逃げ出さうとする、

「妖怪待て」と叫んで、偽三藏も亦雲を起して追ひ付いた、國丈蟻龍杖を揮つて戦ふ事二十餘合、力疲れて、一道の寒光と變じて、身を轉じて後宮に飛び降り、彼の美人を引渡つて、行衛も知らず消え失せてしまつた。

愚王の迷夢此の一舉に醒めて、厚く偽三藏に稱謝する、偽三藏が眞三藏を連れて來て各本

身に歸り、小兒を隠したのも我等の所爲だと告げると、國王益々恥ぢ悔いて、妖怪討伐を悟空に頼んだ、悟空が

「彼等は始め何處から來たと申しました」と問ふと、國王が

「彼等は、此處より南七十里、柳林坡清華庄から來たと云ふた」と答へる、悟空が再び雲を起して八戒を伴つて、其方角に來て見ると清華庄など云ふ村は見當らず、只柳の樹のみ茂つて居る、土地神を呼び出して訊いて見ると、

「それは清華庄でなく、清華洞でムらう、此の林の中の、最も大いなる、九枚の柳の下で右に三度廻り、左に三度廻り、三聲連ねて開門と呼べば、洞門が自づと現はれます。」

其通りにして見ると、果して洞門が現はれて、彼の國丈の妖怪が美女と共に洞中に居た、美女をば八戒が打殺すと、白い狐と正體を露はす、妖怪が逃げて行くのを、悟空が追つ驅けると、行く手に福録壽星が待つて居て、是を押へる、妖怪は福録壽星の騎の白鹿であつた。

福録壽星と共に王城へ引歸して來る、福録壽が國王に仙藥を與へたので、國王の宿病も残りなく全快した、先夜の揭諦神等が、一千の小兒を、また陰風と共に運んで來て、親々に

返して遣る、城中の人民が限りなく喜んで、既に出立せんとした三藏等をば、肩上げにして城中へ連れて来て、軒別巡送りに大層な接待をする、一軒に一日づつ送る時には、三年を費さねばならぬ、漸く袖を振り切るやうにして比丘國を離れたが、それでも一月ばかりは引留められたと云ふ。

四十八 和尙皇帝

滅法國と云ふ國がある、國王が、非常な悪願を發して、三年の間に一萬人の僧を殺すと云ふ誓を立てた、既に九千九百九十六人の僧は其の酷手に倒れて、餘す所四人を殺せば國王の立願が満つる事になる。

此處へ三藏等一行が通りかゝつて、其の噂を聞いた、三藏は慄ひ上つて、如何にしたら此の難を免れ得やうと心配する、悟空が、先づ王城へ忍び入つて見ての様子で、方法を考へやうと、城外に師父等を隠して置いて、自身は蟬となつて城内に飛び入つた、頃は初夏の比で、日は既に暮れ果てゝ居た、町々の燈火賑かな中を、飛び廻つて行くと、旅宿王小二店と書いた掛け行燈のある家で、旅客が八九人、衣服を脱いで涼んで居た、此の脱ぎ捨て

た衣服を見て、悟空が忽ち一計を案出し、卒然行燈や燈火やの火を翼を以て打ち消して、人々の立騒ぐひまに衣服四領を掻き攫つて逃げ出した、逃げ出して門口で振り返つて、

「王小二、我は齊天大聖と云ふものである、此衣服が入用なで借用して行くが、決して盗みはせぬ、明日は必ず返して遣るぞ」と叫んだ。

三藏等の居る處へ歸つて来て、

「さあ皆で此の衣服を着、頭巾を被り、全く俗家の人となつて城へ入り、明早朝に城を出離れるのだ、忘れても坊主の舉動を窺はずまいとして我々は皆伯樂だと云ふ事にしやう、すべての應對は一切拙者が引受ける、口出しは無用の事だ」と云つた、三藏等が苦笑しながら、何様やら斯様やら俗人に化けて、馬を牽いて城の中に入つた、一軒の大きな旅人宿を見付けて宿を乞ふと、女主人が出て来て、二階の室へ通した、二階には折ふし月の影明らかかに照して居る、女中が燈火を持って上つて来た、悟空が慌たいしく吹き消して、

「此の月に燈火は不風流だ」と云ふ、實は三藏の坊主頭が頭巾の下から見えるからである。

女主人が宿帳をつけに来た、悟空が

「此の人は唐大官、拙者は孫二官、此れが猪三官次が沙四官、皆伯樂で十人兄弟の内だ、あとの六人は馬百十頭を率ゐて、後から来る筈だ、來たら又御厄介でムるぞ」と云ふ。夕飯もそこくに済まして、寝る事になつた、眠つて居る間に頭巾が落ちて、僧體を現はしては大變だ、悟空が女主人を呼んで、

「實は四人の者共が、折悪しく風邪の氣であつたり、目が悪かつたりで、明るい處い部屋に寝たく無い、小さい暗い部屋はあるまいか」と云ふと、女主人が、

「小さい暗い部屋などを望みの客は、百人のうち一人も有りませんから、手前共は皆明るい居心の好い部屋を建て、ありますむむを得なければ、大長持の空いたのがありましたから、それにお寝みなさらぬか」と云つた、それでも結構ぢやと最先きに八戒が還入つた。

夜も次第に深けて來る、大長持に蓋をしてある裡に、四人で餅の如くになつて居るので、蒸されるやうに暑い、それでも晝の勞れで、三藏等は汗を掻きながら眠りに就いたが、悟空は獨り覺めて居た、やがて八戒の大きな耳を引張つて呼び起して

「なあ弟、我等の元手が四千兩ある、此間賣つた馬の金が合せて三千兩、後から與いて來

る馬共も、賣れば矢張り三千兩、金の儲かると云ふは面白いものではないか」と云つた、是は飽くまで宿の者に、伯樂と思はせる爲めに云つたのである、處が壁隣りに宿つて居たのが強盗の手先であつた、此の話を聞くや否、窓から飛び出して、二十人ばかりの同類を連れて來た、門を乗り越し、兩戸を蹴破つて亂入した、宿の者等が寢ばけ眼を擦り擦り狼狽へ廻るに目も呉れず、悟空等の部屋に踏み込んで、此の大長持ちこそ金銀財寶の入れである物であらうと、繩からげにして擔ぎ出し、白馬をも厩から引き出して、仕合せ好し

と城門の傍まで來て、曉くるを待つて城門の開くと共に逃げ延びやうと企んだ。

處が折が善いやら悪いやら、城中巡廻の兵隊が通り合せて、そりやこそ怪しの者共と取り圍み、一人も残さず縛り上げて、大長持や白馬も共に、屯營に引いて行つた、長持ちの裡では重ね々驚いて居る、三藏が

「悟空、汝の猿智慧が飛んだ事になつた」と咄くと、悟空が

「御心配なさるな、方法は幾何でもムるから」と云つて、忽ち蟻と變じて長持を浴り出で、

鳥となつて王宮へ翔つて來た。

夜正に閑にして王宮は内外の燈火微かに寂寥と静まつて居る、そこで悟空が左の臂の毛を

悉く抜いて、睡り盡となして、先づ上は國王后より大臣諸司一人も残さず留らせた、次に右の臂の毛を抜いて幾百の悟空を作り、鐵棒を分ちて作つた幾百の剃刀を持たせて、正體もなく眠りこけて居る君臣の頭をば、皆一時に剃り圓めてしまつた。

王宮の夜が明けかゝると、國王がふと頭が寒いので眼を覺ました、撫でゝ見ると驚く可し何時の間にか坊主となつて居る、傍の錦の床の上には是も尼になつた后が寝て居る、ますます驚いて侍女を呼ぶと、半泣きになつた尼侍女が出て来る、是常事ならずと急ぎ朝廷に出て大臣等を召す、いづれも坊主大臣坊主武官等が、面目なげに參集して来て和尚皇帝の前に平伏する、滿廷の君臣盡く僧頭となつて、恰も馬鈴薯を洗つて縁側に乾しならへた如しである、國王が是を見て手放して泣き出した、大臣等が諸共に

「是全く年來僧を殺した罪を、天の罰したものでムらう」と泣聲を揃へて奏上すると、國王が、

「全くそれに違ひあるまい、以後決して斯かる惡業を企てまい」と云ふ。

其處へ城廻りの兵隊頭が、大長持を運んで来て、



老皆田頂

と云つた、開いて見ると坊主が四人出た、汝達は何者かと問ふと、
 「臣等は大唐の僧侶、西天の經を取りに行く途中、御國では僧を殺すと聞いて俗人の形となつて長持に眠り、賊の爲めに夜半奪ひ出されました」と云ふ。
 國王は此の折柄である故、大さに三藏等を接待なして、今迄の悪行を懺悔し、國名を改めて欽法國となし、禮を厚うして三藏等を城外に送り出した。

四十九 三藏の首級

行く事幾日、或る日一の嶮山に差しかつた、峰の彼方から、怪しき風吹き來り霧立ちのぼるを見付けて、

「悟空、彼の霧は」と三藏が訝がる、悟空が雲に乗つて飛んで行つて見ると、山の下に一群の妖魔が居て、一人の魔王が霧を起して居るのであつた、其時悟空がフト例の惡魔心を出して、何氣なく歸つて來て、

「いや、彼れは妖魔でも何でもない、山向ふの村で、施行の御馳走を作つて居る湯氣でム」と云ふ、是を聞いて八戒が生唾を呑み込み呑み込み、悟空の袖を引いて小聲なり、

「師兄、其御馳走を喫つて来たらう」と云ふ。
思ふ圖に當つて悟空が眞顔になり、

「喰つては来たが、如何にも鹹くて困つた」と云ふと。

「鹹くても結構ぢやないか、内分で己にも喰はして呉れ」と頼み、三藏の前に出て、

「師父、果して妖怪が出ぬとすれば、馬の秣を少々調へねばなりません、拙者が其村へ参りませう」三藏が笑つて、

「汝が自身で働か出すとは珍らしい事である、行つて来て呉れ」と許した、八戒が勇み喜んで山をめぐつて行くと、忽ち妖魔の手下が見付けて、バラ／＼と立ちかゝつて、引張つて行かうとする。

「いや村の衆、然う引張らぬでも、拙者は元より施行を當てにして来た者でゐる」と八戒が云ふ、

「何を云ふ愚坊主が、己達の方で汝の肉を施行されたいのだ」八戒が驚いて、

「汝等は村の衆では無いか」と云ふと、

「己達は此山の南山大王の手下であるぞ」と口々に叫喚く、八戒始めて悟空の悪戯と知つ

て、大きに怒り憤り、釘把を揮つて散々に打ち散らす、處へ南山大王が現はれた、

「坊主、汝は何者か」

「己は唐の三藏法師の弟子に猪八戒と云ふ者ぢや。」

しばらくして悟空がクツ／＼と噴き出して笑つた、沙僧が、

「師兄何事だ」と聞くと、實は八戒奴を斯く斯くして遊んだのだ、師父には内分にして居

れ、今から行つて手傳つて遣らうと、身の毛を抜いて偽悟空を作り、沙僧と並ばせ置き、

本身は雲に乗つて来て見ると、八戒と南山大王とが必死になつて戦つて居る、手下の魔兵

が取り圍んで力を助けるから、始終は八戒が危い、そこで雲の上から、

「八戒確りせい、己が来た孫悟空が来ぞ」と呼ばつた、其聲が千人力で、八戒の勢以前に

倍し、遮二無二振り廻す釘把の鋭さに避易して、妖魔等は引上げた。

悟空は直ぐ様雲を回して、偽悟空と入れ替り知らぬ顔をして居る處へ、八戒が湯上りのやうな汗になつて、息を切らして歸つて来た、

「やあ飛んでも無い目に會ひました師父、師兄に欺かれて、喰氣にはまり、施行の御馳走と思つて行つて、妖魔に取り圍まれ、若し師兄の聲援が無かつたなら、殆んど生捕となる

ばかりでムつた」と云ふ、三藏が
 「何を云ふのぢや八戒、悟空は先刻から此處に居るでは無いか。」
 悟空が、

「八戒、兎も角此山は用心して越さねばならぬ、汝が先頭になつて行かぬか」八戒は妖魔
 の力、さして恐るゝに足らぬと知つて居るから、大威張りて先を拂ひ、悟空が殿となつて、
 まばら行くくと、森影より忽然として以前の南山大王が現はれた、八戒が直ちに是と打合
 ひを始める、すると又一方の草の中からは一人の南山大王が現はれて、沙僧に戦を挑む、
 見て居る悟空の後からも又一人の南山大王が現はれて打つてかゝる、三人が三人の魔王と
 離れ々に争つて居る隙に、眞の南山大王が雲の中から手を延ばして、三藏を攫つて飛ん
 で行つた、三人は各々對手を追拂つて、振り回ると師父が見えぬ、さては妖魔の謀計に中
 てられたと、罵り叫び彼方此方と山を踏み荒して駆け廻る、崖の下に洞があつた、隱霧山
 折岳連鑛洞と刻してあつた、此處こそ妖魔の住み處と、八戒が釘把を擧げて洞門を打ち破
 りにかゝる。
 門の上から小妖が頭を出して、



徒来哭也



「孫大聖、誠に申譯がありませんが、貴方の師父を捕へて来ました處、手下の者共が、忽ち寄り集まつて喰つて了りました、大王は甚だ濟まぬ事に存じて居ります、漸く首だけ残つて居りましたから、せめて是をお返し申します」と叫んで、生首を一つ投げ出した、八戒が、

「師父は早殺されたか」と大聲に泣く、悟空が

「八戒、是は偽首だ、眞物なら投げたとして此んな言はせぬ筈である」と云つて、鐵棒で打碎くと柳の木根株となつた、倍々怒つて洞門に突きかゝると、また小妖が頭を出して、

「大聖様、實は先刻のは偽首でムつた、此度のごとは眞物でムるから、充分御供養なさい」と再び投げ出した生首は木でもなく、石でもなく、正に三藏法師の首である。

是に於て悟空先づ哭し、八戒沙僧悲しむ叫び、涙ながらに山の麓の木陰に師父の首を埋め、塚を築いて共々念佛を唱へて居たが、悟空は恨氣胸に塞がつて、仇を復さねば承知が出来ぬ、沙僧に塚を守らせて置いて、八戒と共に洞門に攻め寄せた、妖魔の方では、悟空等の悲嘆の間に、洞門を土石を以て堅固にしてあるから、八戒の釘扱も力に及ばぬ、悟空が「待て〜八戒、正門は斯く固めてあつても、裏門は用心してあるまい、裏門へ廻つて見

やう。」

山の裏手へ行つて見ると、谷川が流れて居る、谷川に遡つて行くと、水は魔洞の中より出ると覺ほしく、水門嚴重に崖の間にあつた、悟空が溝鼠と變じて、水門を潜り脱けて行くと、此處即ち魔洞の後庭である、更に蠅と變じて家の中に飛んで入る、魔王が下手共と酒を飲んで居た、

「大王、最早御安心でゐる、彼等は二度目の生首を全く唐僧と信じ、塚を築き念佛して悲泣して居ります、其内立ち去るでムらうから、それから慈々唐僧の肉を味ひませう。」

さては師父はまだ生きて居られたかと、悟空或は喜び或は怒り、毛を抜いて睡り蟲となして、魔王や手下の大勢に取り付かせて置いて、奥の方を探し廻ると、果して三藏が縛り上げられながら無事で居た、

「悟空、早く救つて呉れ、八戒等は如何したか」

「師父が亡くなられたと信じて泣いて居ります、そこで縛り繩を解いて背負ひ、開鎖の法を以て洞門を打開き、塚の邊に歸つて来る、二人は是を見て日が出たやうに喜び呼ばはる。

また八戒と連れ立つて行つて、魔王の睡つて居るのを縛り上げて塚の下へ捲いで来て置いて、洞の中へ火を放つと同時に毛を収めた、幾多の魔兵共は、睡りが覺めると共に、火に焼かれて、三々五々黒焦げとなつて了ふ、魔王の睡り蟲を除つて、打殺して見たら大いなる豹の本身を現はした。

五十 犀 牛 佛 尊

正月十三日の晩に、金平府中に入り、慈雲寺と云ふ寺に泊つた、

「貴僧方は何處よりお出になつた」と寺僧が問ふ、

「拙僧等は唐土より西天雷音寺に經を取りに行く者でゐる、雷音寺は此地より凡そ何程ムらうか。」

「此處は最早天竺の外郡でゐる、雷音寺へは二千里と申す事である」と寺僧が云ふ、行程十萬八千里の長旅も、早残り少なに歩み盡くした事である、寺僧等は三藏の道すがらの物語りを聞いて、大に尊敬し、何くれとなく厚遇しながら、

「此の月の十五日は、此城中の民家盡く燈籠を掲げます、其夜如來三尊が現はれなさる

で、美しさも尊とさも中々外の國には見られぬ事故、其日まで逗留なされ」と勅める。三藏は佛様とさへ聞けば、小兒の菓子であるから、喜んで従つた。

其夜となつた、三藏等四人は寺僧の案内に連れられ、城中を見巡つて歩く、家々街々幾千萬の燈籠を掲げて、燈籠は悉く是れ五彩の莊嚴、恰も光明の海に浮んで居る如くである、行き行きて金燈橋に到ると、一際勝れて光り輝く金燈が三箇掲げられてあつた、其光の尋常ならぬのみならず、其の香も亦高く方四五町に薰じ渡つて居る、寺僧が

「此の金燈こそは如來三尊の降り給ふ燈でござるぞ、此の城の南に長天縣と云ふがあり、縣中に二百四十軒の油問屋がござる、其處より一斤三十二兩の銀に當る酥合油を出して此の三つの金燈に盛ります、すべて一千五百斤を費すさうな、其一千五百斤の香ひ油が、如來の降臨と共に一滴も餘さず無くなりなす、是は即ち如來のお持ち歸りになるのちやそうで、若し油が無くならなければ、其年は早續きの惡歲と古から云ひ傳へてゐる」と勿體らしく話す。

忽ち大風が吹き起つた、同時に黒雲が現はれた、そりや如來の御降臨と町の人々が忙たいしく奔り避ける、寺僧も三藏の袖を曳いて、金燈橋を離れやうとする、三藏が、

「如來の御降臨は願ふてもない事である、拙僧は拜さなくちやならぬ」と袖を振り切つて橋の真中に進んで合掌する、黒雲はやがて三金燈に覆ひかかり、如來三尊の形陰々として其中に見えりと、悟空が大聲で、

「師父、危い」と叫んで駆け付けたが、間に合す黒雲は早くも三藏を引包んで東北の方へ飛び去つて行く。

彼等は果して妖怪であつた、いざ追つ駆けねばならぬと、悟空が急ぎ立つて、沙僧八戒と共に、雲を起して飛んで行く、黒雲は一つの大山に到つて消え失せた、其の消えた處に洞門がある、門には青龍山玄英洞と書いた字が月明りで見える、

「妖怪出でよ、師父を歸せ」と呼んで洞門を亂打する。

洞中には三個の妖魔が住んで居る、一人は辟寒大王、次は辟暑大王、次は辟塵大王、三大王が唐僧を真中に置いて、

「汝は何國の僧か」と訊ねると、

「拙僧は唐土より西天に參る者で三藏と申す」、三藏の肉は、例の萬年不老の藥である、大に喜んで、奪つて來た香油で煮て喰はうと用意をすると、忽ち洞外に師父を返せと罵る



聲がする、

「三藏、汝の弟子は何人居るか」

「三人居ります、一人は孫悟空、一人は猪八戒一人は沙悟浄」三人の妖魔が目を見合して驚いた、

「其の悟空とは、五百年前天宮を亂暴した齊天大聖ではないか」
「正に其の大聖でム」

やがて洞門を開いて三大王が現はれた、一人は大斧を持ち、一人は大刀を掲げ、一人は大棍を揮ひ、

「音に聞いた齊天大聖は何處に在る」と叫ぶ、

「己が悟空である、師父を返さぬか、命は免して遣るぞ」

「何、此の小猴が大聖か、名ばかりは大きいが、正體は一掴みに足りぬ毛猴奴汝も共に油煮にされたいか。」

悟空が怒つて一文字に打つてかゝる、八戒は二大王沙僧は三大王を對手にして、折しも月明晝の如き山の上で、一場の大惡戦を開いた、戦ふ事各百餘合、辟寒が相圖をすると、幾

百の手下共が哄と群つて来て力を助けたので、八戒沙僧は遂に力盡きて生擒りになつてしまつた。

悟空は相弟子を捕られてせん方なく、直ちに筋斗雲を放つて天上に救ひを求めに行つた。玉皇が誰を下して助けとなさうと吟味すると、太白金皇が、彼等は犀牛の精でゐる、彼等を降伏する者は二十八宿中の四木禽星でゐらうと云ふ、そこで四木禽星が、玉皇の旨を領して悟空と共に、青龍山に下つて来た、先づ悟空が敵を誘き出しに、洞門に攻め寄せ、三大王が、猴奴、此度こそは逃さぬと勢ひ込んで現はれたが、四木禽星を見て、大に驚き「猴奴、我々の苦手を頼んで來居つた、皆々逃げる事にせよ」と呼ばると、手下の魔兵共が悉く本相を現はして犀牛となりて山中を此處彼處と逃げ廻る、三大王も忽ち兵器を投げ捨て、大犀牛の姿となり東北を望んで走り出した、四木星の内、斗木獬奎木狼が小妖共を追ひ詰め追ひ詰め、一々に打殺して、洞中より三藏等を救ひ出す、奎木狼は曾て魔となりて悟空の厄介になつた者である、何時の間にか罪を許されて元の官職を得たものと見える、洞中の事果て、二星は更に三大王を追つて行つた、悟空と井木犴角木蛟の跡を慕ふて走せて行くと、遙かに西洋大海の上に悟空が獨り叫喚いて居るのを見た。

「大聖犀牛怪は如何なつたか」と聞くと、
 「彼等は今此の海底に逃げ入つたで、二星官は續いて追つて入つた、丁度好い折ぢや、汝等は此處で番をして呉れ、拙者は海中に行つて二星を助けやう」と叫びつゝ、悟空が辟水の印を結んで、潮を分けて海底に沈み入つて見ると、二星官が今しも三大犀牛と渦巻く水の中で戦つて居た、悟空が來たと見て又も三犀牛が逃げ出したが、此騒ぎを早くも知つて、龍王敖順が、太子摩昂を援兵に遣はした、進退二つながら谷まつた辟寒犀は、井木犴に打殺され、辟暑辟塵は共に生擒りとなつて了つた、殺された犀の角は悟空が龍王への贈り物となし、太子摩昂に別れて、二犀牛を曳いて海を出で、再び金平府に歸り來つて、化如来の寶蹟を示したで、金平府民は爲めに以後の夥しき油料の負擔を脱れた、其喜びに三藏等の祠を建て、今も香華を絶たぬと云ふ。

五十一 三藏鮪馬たらんとす

行く事久うして、天竺舍衛國に着いた、長旅も漸く終りを告げんとするのである、或る日布金寺と云ふ寺に宿を求めた、布金寺とは昔、給孤獨長者が、黄金を敷いて、敷いただけ



月下老僧

の土地を買ひ、それを釋迦如來に獻じて説法の殿堂を作つた、其の舊蹟である、晚餐の後、月下に後庭を漫步すると、大きな石柱や瓦の類が、土に埋れ苔を生じて散亂してある、佛蹟已に荒廢して、篤信の長者の名のみ残り、年月幾變轉、當時の人何處にかあると、感慨に沈んで居る處へ、一人の老僧が出て来て、三藏等に對面し、尙其處此處の殘礎斷柱を見せつゝ、次第に奥の方へ誘つて行つた、其時何處からともなく、女の悲しげに泣く聲が聞える、と思ふと彼の老僧が、忽ち地上に拜伏して、

「師父方に御願ひ申し度い事がある」と云ふ、怪んで聞くと。

「拙僧は今年百歳になります、寺の務めにも倦んだで、此の奥の方の室に靜かに暮して居りまするが、去年の今月今夜、矢張り月明であつた時に、一陣の風と共に一人の美女が此の庭の中に降つて來ました、何處の女中であるかと問ふたら、妾は天竺國の王女である、今夜庭で月を觀て居たら、夢のやうに風に吹き送られて此處まで參つたと申す、兎も角寺には若い僧侶も多い事で、其儘拙僧の近所の密室に入れて置いて、其内王城へお歸し申さうと思つて居ると、王城には、王女がチャンと居られて、決して逃げも亡くなりませぬと云ふ話で、然らば此方の王女が妖物で、いもあるかと思ひますが、容貌端嚴

There ~~Box~~

There ~~Box~~

に精神も氣高く、決して怪しい様子はムらぬ、何とも思案に暮れ果て、王女にも云ひ合めて置いて、伴つて狂人の真似をさせ三度の食事なども、小窓から投げ入れて置きますから、他の僧共も狂人と存じて、別に手も出させぬ、かくて月日は立ちまするが、王女の真偽の疑は依然として決しませぬ、拙僧も嘆かほしい事に存じ、王女は殊更、盜の内は狂人のやうに、あらゆる事を叫んで居られるが、夜になると、御両親を思ひ出されて、彼の如く泣いて居られます、貴僧等は長途の旅行に千妖百怪を凌ぐ法力を具へて居られる、何卒王城に寄つて、此の疑を定め、憐れな王女を援つて下されたい」と云つた、

三藏等は此事を胸に置いて、翌日寺を去つて舍衛國王城に來た、城府壯大人民殷賑、實に長安を去つて以來の大都會である、驛館に馬を繋いで、關文を換へに朝廷に行かうとて出掛けると、町はお祭のやうな騒ぎである、人に問ふと、今日は王女が鮎馬選びの日で、彼方の高臺に王女が來て居られる、王女の抛つ毬が中つた人が、鮎馬になると云ふ好運を持つた人である、皆々我こそは毬に中てられやうと、斯く騒がしいのだと教へた、三藏が道を避けやうとすると、悟空が

「師父、布金寺の一件でムるぞ、兎も角外ながら王女を見て置ませう」とすゝめて美し

續 毬僧を打つ



く飾つた高臺の下を通りかゝる、其時王女の手から毬が飛んだ、飛び來つた毬は三藏の僧帽にハッシと中つて、袖の中に落ち入つてまつた。

すると數多の宮女がムラ／＼と降りて來て、

「鉚馬殿下いざ此方へお出なされ」と手を曳き袖を曳く、鉚馬になり損ねの男共は恨めしさうな目で三藏を睨めて居る、三藏は事の意外に驚いて、振り離して逃げやうとすると、悟空が耳へ口を當て、當座の計策を示して、三藏を其儘連れさせて遣り、己は驛館に歸つて居る。

國王は王女の鉚馬が定まつたと聞いて、大きに喜んで居たが、宮中へ連れて來たのを見ると、坊主であつたので是も案外の體である、三藏が、

「拙僧は唐土より西天に參る出家でゐる、何卒此事は御赦しを蒙りたい」と云ふ、國王が

「王女の心一つで定めやう、王女は如何ぢや」と云ふ、王女は

「天地神明に祈つて抛げた、運命の縁に背く事は出来ませぬ」と云ふ、

「然らば赦す事はならぬ、汝を鉚馬とする」と國王が嚴命を下す、三藏は途方に暮れて、

「何卒驛館の弟子共を呼ばれたい、彼等に云ひ付けて置く事もゐる、其上で仰せに従ひま

せう」と云つた。

やがて三人の弟子が宮中に來た、國王は、何れも何れも、師父には似ぬ醜い者共だと驚いて、各々名は何と云はるゝかと聞いた、

「拙者は、東勝神州傲來國、花果山天生の仙、天に登つて官齊天大聖を拜し、天宮を闖がして如來の手に捕はれ、五百年間五行山に徒飯を喫つて居つた、孫悟空と申す者でゐる」

「拙者は三藏第二の弟子、昔は天上の天蓬元帥、酔ふて月の嫦娥に戯れた罪により、下界に降されて福陵山に住んで居つた、八戒と申す者でゐる」

「拙者は、天界に在つては玉皇蓋下の捲簾大將、罪によつて流沙河に落され、人を喫して日を送つて居た沙悟淨と申す者でゐる」國王倍々驚いて、其日は師弟共を宮中に留めた。

五十二月中の玉兔

王女が國王の傍に來て、

「父君、彼の三人の醜弟子達は妖神ぢやありませんか、何卒婚禮の日には、彼等に路銀を遣はして、此處を出立させて下され」と云つた、國王は愛娘の云ふ事は何でも聽く。

三藏が其夜悟空を呼んで、

「如何したものであらう此難を脱れるには」と云ふ。

「お待ちなさい安心して、今一應彼の王女を見て、いよく妖怪と知れたなら、早速退治して國王の迷妄を晴らし、師父の難を解き、不幸の王女を救ひませう」

斯くて婚禮の日となつた、國王は正殿に百官を集め、三藏等と呼び來らせて、多くの路銀を悟空八戒沙僧に渡し、

「是で師父の代りに西天に行き經を取りなさい、歸りに立寄つたら、また更に唐土までの路銀を上げるから」と云つた、悟空等は欣然として別れを告げて出行く、三藏は流石に心細げな顔をして設けの席に坐して居る、程なく王女が、盛裝して、幾多の宮女を従へ、三藏と相對した、鼓樂の音賑はしく起り、大禮將さに行はれんとする時、三藏の耳の處に留まつて居た蠅が、

「師父、彼の王女は斷じて是れ妖魔でゐるぞ、いでや取押へて呉れませう」と囁く、蠅は例の悟空である、三藏が、

「待て〜悟空、此場合君臣を驚かすのは好くない、大禮了つてからにせぬか」と止めたが、性急の悟空が肯かばこそ、大喝一聲と共に、本身を現はして、片手に鐵棒を提げ、王女を望んで走りかゝつた、

「己れ悪妖魔、王女の姿を假りて一國を迷はすとは不届きな。」

滿殿の君臣が膽を潰して立騒ぐ、三藏が忙がはしく國王を抱き留めて、

「陛下、御安心なされ、彼は陛下の爲めに妖魔を驅る者でゐる」と叫ぶ、王女は實に妖魔の變身である、其月其日唐の三藏が此處を過ぎると、始めから知つて居たので、速に事寄せ鐵馬となし、十世修業の法體と接して元陽を受け、萬年不老の太乙天仙とならうと企てたものであつた、事破れたと見るや、御花園に走り入つて、土地廟の中より一條の短棒を取り出し、悟空と半空中に在つて激しく戦つた、是を見て國王等始めて王女の妖魔たる事を知り得たのである。

相戦ふ事百餘合、悟空一聲叫んで、棒を投げ上げると、變じて百千の鐵棒となり、雨の如く妖魔の頭上に落ちて来る、妖魔力及ばずと見て、一道の金光と變じ南を指して逃げ去つた、悟空が問を置かせず追つて行くと、一の大山に来て金光は消え果て、寂然として影も

形もない、悟空は、妖魔が更に身を回して王城に行つて、國王や師父に害を加へる事を恐れ、王城に取つて返して、驛館中に待つて居た八戒悟淨を呼び寄せ、王城を守らせて置いて、またも先刻の山に飛んで来た。山の神土地の神を呼び出して、

「此邊に魔洞は無いか」と訊くと、

「いや一向それらしいものはありません、只彼方の處に、古から三つの兎の穴がムリます」と云ふ、其穴に行つて見ると、數匹の野兎が驚いて走り出たばかりである、尙山を登りつめると、頂上に二の大石があつて、石窟の門をなして居た、此處こそと棒を入れて試みる、果して彼の妖魔が短棒を揮つて現はれた、山上に於て戦ふ事良久しく、天色暮るゝに及んで、彼の妖魔がまたも逃げ出した、兎さじと追て行くと、

「悟空待て」と留めるものがある、月の神太陰星君が後の嫦娥を連れて降りて来たのである、悟空が禮をなすと禮を返して、

「實は彼の妖魔は月中の藥を搗く玉兔である今既に引捕へて置いた、彼が王女を苦しめた所以は、王女の前身は月宮の侍女であつた、曾て事に觸れて彼の頭を一つ撲つた、彼は其

怨みを報はふとして、侍女の後を追つて下界に降り、彼の如く國王を迷はし玉女を苦しめたのである、汝の師父を汚さんとした罪は重いが、何卒我が面に免じて許して呉れ。」

そこで悟空が太陰嫦娥と共に玉城に歸つて来る、月が城の上に降つたのだ、君臣甚だ驚嘆して一齊に香を焚き禮拜する、八戒阿呆が卒然飛び上つて嫦娥の腰に抱き着いた、

「嫦娥殿、昔の天蓬元帥を忘れまい、御身の爲めに天を墮されて斯かる身となつた」と叫喚く、悟空が其の襟頭を取つて地上に引落し、

「此奴出家となつて尙昔の夢を見るか、無識者」と三つ四つ喚はせる、

太陰君と嫦娥は、玉兔を拉れて歸り昇つた、國王は、眞の玉女の無事に布金寺に忍んで居ると聞いて、枯れた木に花咲く喜び、翌日三藏等と共に布金寺に鳳簫を向けて、親子數年振りの對面に泣き、老僧には厚く贈して城中に伴ひ歸つた。

五十三 完

結

十萬八千里の途、幾多の妖魔惡獸の難を経て、三藏師徒は漸く西天靈山の麓に着いた、旅中に十四年を費して、三藏の齡は正に四十五歳、靈草に花美しく靈木雲を凌ぎ、禽獸相犯



八戒旧情

さす平和安樂の佛地を見て、越し方の辛苦も一朝に忘れ、四人欣欣然として靈山を登りかかると、一條の大河が道を横ぎつて流れて居た、廣さは七八里で、獨木橋が糸の如く架つてある、四五間の谷川でも獨木橋と云ふは難儀なものである、三藏が困り果て、手むと、悟空はするくと向ふへ渡つて、早く來なさいと手をあげて招く、招かれても三藏はおろか八戒とても足が進まぬ、悟空が還つて來て、

「師父、此處が凌雲渡と云つて、此河を越さねば佛地には行けませんぬ、さあお渡りなさい八戒汝などの渡れぬと云ふ事は無いぞ、渡らぬか」と責める、八戒が、

「到底も渡れぬ、渡れば落ちるに定まつて居る、己は雲に乗つて行かよ」

「雲に乗つて越しては何にもならぬ、歩いて行け。」

頻りに押問答をして居る處へ、一人の老人が小舟に棹して來た、

「昔の衆、橋が恐くば船に來なさい」三藏が喜んで船に乗らうとすると、驚く可し船には底が無い、再び逡巡する處を、悟空が脊をウツと突いた、あつと叫んで水中に落ち込む、其襟を取つて船中に引き揚げると、一の死骸が水に浮んで流れて行く、

「やあ死人がある」と三藏が驚き呼ばる、悟空が笑つて、

「師父、彼は師父の死骸でゐるぞ」と云つた。三藏がよく見ると成程自分の死骸に相違ない。今迄奇怪なものは飽く迄も見たが、斯かる不思議は思も寄らぬ事である。悟空が、「師父、今日こそは師父始めて凡身肉體を脱して、佛身法體となつたでゐるぞ、喜ばしい事では有りませぬか」と云ふ。

三藏も急に身の清淨輕快になつたのを覺えた。最早底無し船も苦にならぬ、早くも彼岸に着くと、彼の船頭は接引佛祖の姿を現じて飛び去つた。次第に靈山に登り行くと、満月の風光到底人間の言葉に云ひ盡せるものではない。大雷音寺の門には二大金剛が迎ひ立つて居る。二門三門を過ぎて大雄寶殿前に跪く。釋迦如來は菩薩阿羅漢優婆塞天龍夜叉比丘比丘尼百千萬の御弟子達に圍繞されて、三藏の勞を稱し、過ぐる處の諸王國の關文を檢し佛食を與へ、やがて五千四十八卷の經巻を取り出さしめて渡された。斯う云へば簡單であるが、本文には是に種々の手數ある裝飾あり、種々の理窟をつけた小話がある、要するに佛家の勿體をつけんとしたものであるから、譯筆は大に省略を用ゐる。

大唐長安城の洪福寺の松の枝が一夜の内に東に向いた、三藏法師勅命を帯びて西に去つてより、十餘年の間消息が無い、憐む可し堅信の大徳も志を得ずして途上の白骨となつ



松樹の存

たかと、思つて居たに、松の枝が東に向いたから誰々も不思議に驚いた、處が其日王宮の正門に突如として三藏師徒が現はれた、白馬には貴き經卷を負してある。

太宗皇帝、是を聞いて驚き喜び、親ら手を把つて殿上に誘ひ、路すがらの十難百苦や、大雷音寺の光景や、悟空等弟子の來歴やを聞いて、事毎に感嘆し、先づ大宴を開いて四人を祝賀した、八戒は此處を先途と喰ふかと思ふと、八戒も西天の佛食を喫してより、五慾頓に減じて常の暴食を試みなくなつた。

次の日長安第一の名刹、鴈壇寺に於て、西天渡來の寶經をば、三藏法師をして講演せしめた、皇帝皇后文武の百官臣民悉く群集して聽聞する、其時香風吹き來り空中より八大金剛身を現はして、

「西去の期は迫つて居る、講經を止めて出立なさらぬか」と呼ばつた。

如來の佛勅により、三藏等は經を持つて長安に行つたら、直ぐまた西天に引返して、永く如來膝下の人とならねばならぬ、十萬八千里の往路は、經を取るが爲めに幾多の辛苦に遭つたか、歸路は最早其の要が無い、況んや三藏肉體を脱して佛身となつて居るから、白馬經卷諸共に八大金剛の雲に乗せられて長安まで運ばれた、其の雲中の往復は八日と限られ

である、八日の期は明日で盡きる。

そこで三藏が徐ろに經卷を擱いて、

「臣僧、經を取るの任果てました上は、再び靈山に赴いて、如來の御許に留らねばなりませんぬ、何卒永く此の經を重んじ、佛法尊重の御心撓む事無く、高僧を選んで講經を續け給はるやう」と恭しく太宗皇帝に別を告げて、悟空等白馬と共に、雲中に昇り、西を指して飛んで行つてしまつた、此經大唐に渡つて、如何ばかりの徳化を後の世に遺したか、三藏の名は徳教の大神人として、今も尙無量の敬禮を享けつゝある。

三藏等は西天に歸つて、如來の教化の下に、日々法樂不盡の壽を得た、楞嚴功徳佛とは、三藏の佛名、悟空は鬪戰勝佛、八戒は淨壇使者、是は三十世界中の、佛事供養の飲食を取扱ふ佛役である、八戒は飽くまで八戒の本姓である、沙悟淨は金身羅漢、白馬は元の龍身となつて八部天龍。

其時悟空が、既に此の如くんば願くは頭金の金箍を除きたいものだ、手を揚げて撫で、見たら、箍は何時の間にか無くなつて居た。



Handwritten text in a vertical column, possibly a signature or a label, located in the upper right corner of the drawing's frame.

(記號五本發原初)

刷印日十二月二十年二十四治明
行發日正月一年三十四治明

印刷所
東京市小石川區久松町百〇八番地
山田英二
博文館印刷所

發行所
東京市神田區富山町十八番地
左久良書房

著作者
小杉未醒
發行所
關字三郎

一册金壹圓拾錢
總送料金拾四錢

明治四十二年十一月改正

出版圖書目錄

東京市神田區富山町十八番地

左久良書房

<p>美 著 君 柀 澁 原 塚 箱 本 書 叢 柀 澁 入</p>		
<p>清加 卷第九 正藤 錢五拾八金 錢貳拾金送</p>	<p>金忠輔 卷第八 錢拾貳圓壹金 錢四拾金送</p>	<p>水野 卷第七 越前守 錢拾圓壹金 錢四拾金送</p>
<p>御桃 殿山</p>	<p>快足袋 卷第十 錢拾圓壹金 錢四拾金送</p>	<p>合長 卷第十 戰策 錢五拾八金 錢十金送</p>
<p>近刊</p>	<p>治のをちて前亦を紙ありて伊達の宗足 一期して男老をりや少 金藤をく壯は断ちて 血はをて急</p>	<p>後の色もか輝きて 威の威も輝きて 威の威も輝きて</p>

<p>美 著 君 柀 澁 原 塚 箱 本 書 叢 柀 澁 入</p>		
<p>葵と桐 卷第三 圓壹金 錢四拾金送</p>	<p>逸大 卷第二 平鳥 錢拾貳圓壹金 錢六拾金送</p>	<p>正由 卷第一 雪井 錢拾貳圓壹金 錢八拾金送</p>
<p>光水 卷第六 園卿 錢拾九金 錢貳拾金送</p>	<p>幸眞 卷第五 村田 錢五拾八金 錢貳拾金送</p>	<p>重木 卷第四 成村 錢拾九金 錢貳拾金送</p>
<p>木門の行はるるに 光水は三三の 園卿は左</p>	<p>可憐の神の如き 大田の功を 幸村の功を</p>	<p>門の影のをし士 其に後除かぶる 人の乏はけもこの時</p>

繪口史女草千原塚 裝日洲松藤齋

作大生畢君柿澁原塚

年百三戸江

卷五 十部全

裝幀華麗

<p>卷第一</p> <p>家康公前記</p> <p>金壹圓參拾錢 送費金拾八錢</p>	<p>卷第二</p> <p>家康公中記</p> <p>金一圓三十錢 送費金十八錢</p>	<p>卷第三</p> <p>以下續刊</p>
---	---	-------------------------------

江戸趣味の復興に今や原典なる現社會を風靡して新たに明治の日本を飾らんとするに至れり。江戸ッ子の面目を發揮する正に斯時にありと云ふべし。而して、江戸ッ子の祖先が活躍せる江戸三百年の歴史は、如何に多趣味なるべきよ。本叢書は歴史小説の泰斗たる澁柿園塚原野州先生が、徳川三百年間に於ける著名の人物事件等を捉へ來つて、一貫金玉の文字の綴成されたるを編纂せしもの、澁柿園塚と相俟つて文壇の珍とすべし。坊間常に見る所の徳川氏十五代記の記述類に優劣たらしし讀書子は、本叢書を得て、始めて其平生の渦を覽するに足らんかな。

美 本	著 書	君 叢	柿 栢	澁 原	塚 時	箱 入
騷別	長山	茶天				
動木	政田	屋下				
近 刊	近 刊	近 刊				
宗佐	雲渦	響龜				
吾倉	雄浪	討山				
近 刊	近 刊	近 刊				

著君醒未杉小
集畫漫醒未

<p>第壹篇 金送 漫年書 九拾金 送費 五拾金</p>	<p>第貳篇 金送 漫地畫 九拾金 送費 拾金</p>	<p>第參篇 金送 新繪本 一圓 譯西遊記 十圓 錢錢 四十金</p>
<p>中篇 家語筆執文詩 沼波 見早 有音 音君 平田 空思 水明 水君 谷塚 軒水 種水 君君 長谷川 小武 吉河 島林 江井 國島 島島 島島 島島 細川 口島 水雄 水君 細川 口島 水雄 水君 花間 紅田 島島 島島 紅象 洞少 音君 音君</p>	<p>中篇 家語筆執文詩 伊野 藤田 水君 見野 藤田 水君 思葉 政空 水君 水舟 女靴 水君 鹿沼 小國 木田 細步 島島 島島 島島 島島 櫻島 島島 水君 水君 伊吉 阪田 岡島 岡島 岡島 岡島 藤江 本紅 島島 島島 銀島 島島 島島 島島 月島 島島 島島 島島</p>	<p>詩以て有聲の畫ならば、西遊記は即ち有聲の漫畫。 の酒いで盡きさる如く暢也。千景百態刻す所なし漫畫天地。 中篇 藝文萃摘 三通天八 龍馬の鞍子 藏地 戒となす 藏河を垂る 女の盛 龍水の流る 恬儒牛恬八天 空 同空 或上 權悟の道心の 悟 は 午に 暁 る 空 暁る し 曉 其 四 孕 尿 三 淡 沙 河 之 悟 淨 他 天 か 蔵 蔵 蔵 蔵 蔵 蔵 數 行 和 成 成 成 成 成 成 十 路 和 成 成 成 成 成 成 辰 種 向 水 君</p>

繪口君郎四國谷滿 畫裝君醒未杉小
著步獨田木國故

<p>小説 (六版) 運命 金七十五錢 送費 十五錢</p>	<p>欺のか記ざ 金貳圓五拾錢 送費 十八錢 内地 十八錢 清海 十八錢 南洋 十八錢 南洋 十八錢</p>	<p>愛弟通信 新版 金九十五錢 送費 十五錢</p>
<p>題已に痛絶、想登に恨絶ならざらんや、一巻九篇、盡く人生の大變遷を 穿透し來りて、字々刀鋒し、句々鐵錐す如是の小作は餘樂的作に非ず 目 運命論者 巡 賞 酒中日記 次 馬上の友 悲 究 齋の悲み 空知川の岸邊 非凡なる凡人 日の出</p>	<p>清新の想と燃屏の明とを有する著者が生涯を通じて最も記念すべき五 ヶ年の日記に收むる所や何ぞ煩悶もあるべし。慰藉もあるべし。其體 は如何、其涙は如何、時に或は恩人を罵り、吾知と反き、感情の赴く所 山時ち海横ふ。</p>	<p>文學が獨り平和の産物にあらざる限り、戦の巻にも幾多の詩材なかるべ からず。愛弟通信は實に著者が海軍從軍の際に得たる金玉の文字にし て、憐たる戦國の間に生れし詩材を、自在に捕撿して、縦横に就述した るもの、蓋し好調の戦中文學といふべし。</p>

近刊書目

<p>小山内薫君著 病院</p>	<p>泉鏡花君著 簑振袖</p>	<p>生田葵君著 俳優組合</p>
<p>著者其母と其姉との病床に侍して十幾年を過ごし、顧みて自ら醫士の任務あるを思ひ、其家庭を病院に擬して本書を成す。蓋しこれ著者の長編に於ける第一の試作にして、別に一境地を開けるもの、庶幾は來つて其聲を聞け。</p>	<p>其文其想共に明治文壇の珍とするに足る著者の近業なり。久しく君の筆腕に接せざりし我が讀界は、爰に木香を得て其満を醫すべく簑振袖のゆしがつきくの振舞は今こゝに百ほのが花かも。</p>	<p>忽ちにして妖嬈花の如き美婦たり、忽ちにして赤心人を泣かすむべき愚臣たり、其他或は白面郎、或は強賊、或は伎妓と夫々に扮して槍舞臺に別天地を展げる俳優の上にも、幾々の世話物にあり、久方の空懸ける風にも浮世の糸の離れぬぞ是非なき。</p>

新刊書目

<p>正宗白鳥君著 落日 送金八十五錢</p>	<p>柴田流星君著 岡田三郎助君書 唯一人 送金九十二錢</p>	<p>田山花袋君著 岡田三郎助君書 田舎教師 送金一圓六十錢 送金十八錢</p>
<p>才藻一度煥發して光彩燦爛たるは著者の今日也。本書は其短篇に熟したる筆を掲げて、長篇に新しき試みをなせるもの、落日の紅、蘇命路の山を映すは天女霓裳羽衣の曲を舞ふの時、これや抑々何物をかうつせる。</p>	<p>社會の孤兒にして、總て又た文壇の孤兒たる著者が、其孤獨に堪へずしてのせる一篇心血の文字には如何なることか記されたる。茫々際涯を知らざる人世を唯一人之く旅人の身の位びしさよ。</p>	<p>累々たる墳墓の中、冷塊の寂かに横はれるあり、寺僧教へて此の日記の主なる田舎教師はこゝに水眠せりと。著者其傍を通さること幾回、彼の才藻はこれを捉へて一篇の大作を成さずんば休まず。乃ち想を構へ筆を呵し遂に五年の星霜を閲して本書成る。蓋しその心血の凝つて寫をなせるもの、文壇の珍といふべし。</p>